

日本住宅公団 田原団地建設予定地内
田原遺跡発掘調査概要・I

—四條畷市大字下田原・上田原—

1980・3

四條畷市教育委員会

日本住宅公団 田原団地建設予定地内
田原遺跡発掘調査概要・I
—四條畷市大字下田原・上田原—

1980・3

四條畷市教育委員会

は　し　が　き

四條畷市田原の地域は、江戸時代中期にこの地方を旅行した貞原益軒の南遊紀行に次のように紹介されている。「岩舟より入りて、おくの谷中七八町東に行けば、谷の内頗る広し、その中に天の川ながる、其里を田原といふ、川の東を東田原と云、大和國也、川の西を西田原と云、河内國也、一渦の中にて両国にわかる、川を境として名を聞くす、此谷の南より北に流れ、又西に転じて岩舟に出で、ひくき所に流れ天の川となる、凡田原といふ所此外に多し、宇治の南にも奈良の東にもあり、皆山間の幽谷の中なる里なり、此田原も其入口は岩舟のせばき山間を過て、其おくは頗るひろき谷なり、恰も陶淵明が桃花源記にかけるが如し」とあり、まさに別天地の感をいだく地域である。

このたび日本住宅公団により、この田原地域の東部山地一帯を住宅団地としての開発が計画され、開発に先立っての埋蔵文化財の調査が行われることになり、本市教育委員会がこの調査を受持つこととなった。昭和53年度には府教委の指導を受け、共に全域の分布調査を行い、昭和54年度にはその結果にもとづき開発地北部の戎川流域一帯を重点とした調査を行った。その結果戎川左岸段丘上には、縄文時代早期のものとみられる遺構と遺物が検出された。このことはすでに原始の時代に田原の里に祖先の生活があったことを示し、近畿地方で数少ない縄文時代早期の遺跡として今後注目されることになるであろう。

調査に当っては、日本住宅公団はもとより大阪府教育委員会をはじめ地元の方々等数多くの方々のご指導ご協力をいたゞき心から感謝の意を表する次第である。

四條畷市教育委員会

教育長 櫻井 敬夫

例　　言

1. 本書は、四條畷市教育委員会が、昭和53年度～昭和54年度に日本住宅公団田原団地建設工事に先立ち、日本住宅公団関西支社より委託を受けて実施した四條畷市大字下田原840番地他に所在する田原遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、昭和53年11月1日に着手し、昭和54年3月31日に昭和53年度調査事業を、又、昭和54年8月1日に着手し、昭和55年3月31日に昭和54年度調査事業をそれぞれ終了した。
3. 発掘調査は、教育委員会社会教育課技師・野島 稔を担当者とし、調査補助員として相松 透、永井英司、森本澄一があたった。
出土遺物の整理・実測などについては、野島 稔、相松 透、永井英司、森本澄一、永井喜子、阪本富美子、川本三智子、一色ルリ子、井手恵子、溝上キヨカ、鴨川羊子、山口文代、岸上智子、山口真澄、樋口博子、藤野 三水流、畠中みゆき、植田真紀、松岡俊江があたった。
4. 本書の執筆は、第1章～第4章、第6章を野島 稔が、第5章を櫻井敬夫が行なった。
5. 発掘調査の進行、報告書作成などについては、大阪経済法科大学・瀬川芳則、大阪府教育委員会・井藤 徹、東大阪市教育委員会・下村晴文、奈良県教育委員会・岡崎晋明、財團法人枚方市文化財研究調査会・宇治田和生、三宅俊隆の各氏から種々の御教示をうけた。又、調査に際して、心よく大切な土地を提供していただいた土地所有者・安部武利、東本久枝、田中秀雄、東山広雄、松本 守、谷村繁雄、橋本寛造、中尾吾一、谷村照雄、谷村利雄、太田美千代の各氏には心から謝意を表する。
6. 発掘調査の進行については、日本住宅公団関西支社・田原宅地開発事務所、四條畷市田原開発促進協議会々長・村川円久、下田原区長・中尾雅雄、上田原区長・寺井正夫各氏には終始懇切なご協力をうけることができた。記して厚く感謝の意を表したい。

本文目次

はしがき

例　　言

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置と歴史的環境	3
III 調査概要報告	
第1次発掘調査	6
第1地点	6
第2地点	6
第3地点	10
第4地点	11
第2次発掘調査	14
土壌状遺構	15
掘立柱建物跡	15
落ち込み状遺構	15
溝状遺構	18
縄文時代早期遺構	19
IV 出土遺物	27
V 田原遺跡出土の縄文時代遺物について	32
VI まとめ	36

挿入目次

- 第1図 田原遺跡周辺地形遺跡分布図
- 第2図 第1次発掘調査位置図
- 第3図 第2次発掘調査位置図
- 第4図 落ち込み状遺構及び土壌状内出土遺物平面実測図
- 第5図 繩文時代早期遺構及び中世溝状・Pit遺構平面実測図
- 第6図 繩文時代早期石組遺構平面実測図
- 第7図 繩文時代早期の土器、石器出土地の断面実測図
- 第8図 繩文時代早期土器・石器出土地とその周辺
- 第9図 出土土器実測図・I
- 第10図 出土土器実測図・II
- 第11図 出土土器実測図・拓影

図 版 目 次

- 図版1 遺跡周辺の航空写真
- 図版2 調査地全景・落ち込み状遺構全景
- 図版3 落ち込み状遺構
- 図版4 落ち込み状遺構全景
- 図版5 落ち込み状遺構内土器出土状況
- 図版6 土壙状遺構・石組遺構検出状況
- 図版7 縄文時代早期調査地区全景
- 図版8 縄文時代早期調査地区全景・石組遺構
- 図版9 NO.1 NO.2 トレンチ
- 図版10 遺物写真・土器I
- 図版11 遺物写真・土器II
- 図版12 遺物写真・土器III
- 図版13 遺物写真・土器IV
- 図版14 遺物写真・土器V
- 図版15 遺物写真・土器VI
- 図版16 遺物写真・土器VII
- 図版17 遺物写真・土器VIII
- 図版18 遺物写真・土器IX
- 図版19 遺物写真・土器X
- 図版20 遺物写真・縄文式土器I
- 図版21 遺物写真・縄文式土器II
- 図版22 遺物写真・縄文式土器III
- 図版23 遺物写真・縄文式土器IV
- 図版24 遺物写真・石器I
- 図版25 遺物写真・石器II
- 図版26 遺物写真・石器III
- 図版27 遺物写真・石器IV
- 図版28 遺物写真・石器V

田原遺跡発掘調査概要

I 調査に至る経過

田原遺跡は、日本住宅公団が田原地区周辺の既成集落を含め、生活環境を計画的に整備改善していくとともに、大阪都市圏の住宅困窮者のために健全でかつ良好な宅地と住宅とを計画的に多く供給する目的として田原団地建設を計画している。この建設予定地内に検出された遺跡を一般に田原遺跡と呼称する。

昭和50年度に大阪府教育委員会が田原団地建設予定地内の遺跡パトロールを実施され、又、昭和52年度に四條畷市教育委員会が日本住宅公団関西支社からの依頼により建設予定地内の遺跡パトロールをそれぞれ実施した。

その結果国道163号線と市道辰巳谷線の交叉する西側の丘陵に花崗岩で築かれた横穴式石室1基を確認することができた。この丘陵は標高176mから3本に、東向きに派生する北端の丘陵中央部に位置している。出土遺物は不明であるが築造時期は6世紀後半頃と考えられる。しかし、もしこれが古墳とすれば今後この周辺の丘陵上に数多くの横穴式石室が検出される可能性がある。

次にこの古墳の東の眼下に流れる戎川と辰巳谷線の交叉する所に角堂橋と呼ばれる橋の周辺に瓦器焼、土師質皿、布目平瓦が數多く表面採集することができた。この橋の名にも出ている角堂は中世の堂があるのでないかと思われる。この場所は現在水田になっているが約50~60m四方の水田から上記の土器片が採集することができた。

山の中腹には、花崗岩が露出している巨石群が2ヶ所に見ることができる。又、この巨石群の周辺には花崗岩の石垣が築かれている。この石垣は地元で近世に、切り石の残石で石垣を築いたと云われている。

建設予定地の南端の字八ノ坪には田原城跡が地元の協力により保存されている。

この田原城については第Ⅱ章の遺跡の位置と歴史的環境について詳しく述べることにしたい。最後に建設予定地内全城に約50基以上の炭焼き窯を見ることができた。

大阪府教育委員会及び、四條畷市教育委員会が発見した土器散布地を日本住宅公団作成の地図上に印を行ない、この資料をもとに日本住宅公団・大阪府教育委員会・四條畷市教育委員会の三者によって協議を行なった。この結果第一次発掘調査はこの土器散布地を中心とし、遺跡の確認及び遺構の保存状態を目的に四條畷市教育委員会が調査を実施した。

第2次発掘調査は田原団地建設に係る戎川改修工事予定地内の調査を中心に実施したも

のである。

II 遺跡の位置と歴史的環境

四條畷市は大阪府の北東部に位置し、奈良県の県境にある。田原は四方を山に囲まれた盆地として夏は四條畷市内より約1度～2度気温が低く住みよい場所である。

田原盆地の中央を北流する天野川が大阪府と奈良県の境になっている。

大阪府側は四條畷市大字上田原・大字下田原・奈良県側は生駒市大字北田原・大字南田原と呼ばれる地名である。

四條畷市大字上田原・下田原は、生駒山系東北部の山裾に位置し、北端には大阪から奈良への主要幹線道路の国道163号線と地区外南部の阪奈道路にはさまれた南北約2キロメートル、東西0.8キロメートル、開発面積約125ヘクタールの区域の開発である。

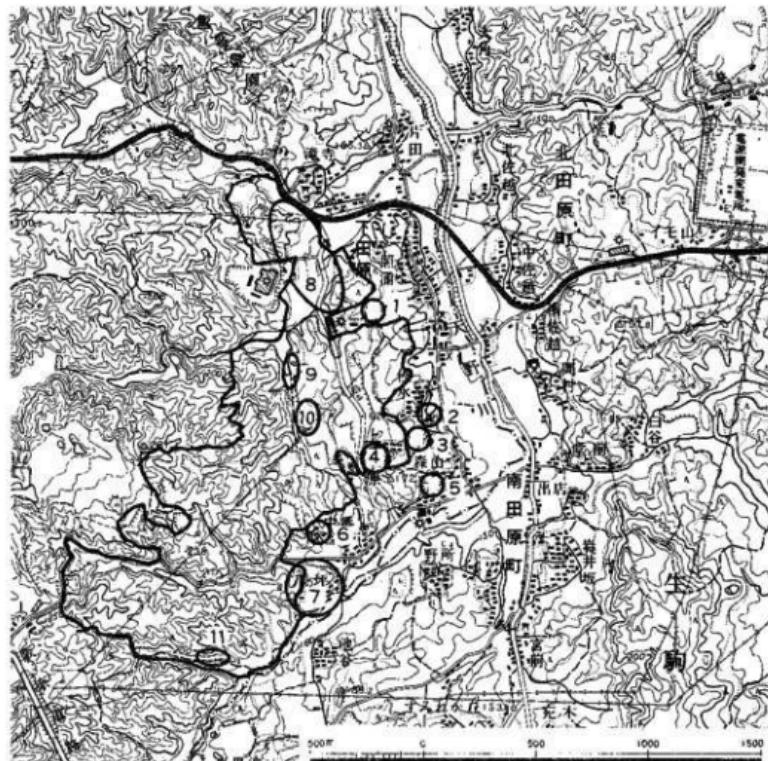
田原団地建設予定地と東側に北流する天野川との間には、上田原及び下田原の既成集落があり、現在人口約1,400人の小規模な集落である。田原団地建設によって日本住宅公団の人口計画では3,900戸約15,000人の人口がこの団地に住む予定になっている。

本地区の地質は、東部が沖積層粘土及び砂礫質で西部の丘陵地は花崗岩及び大阪層群からなっている。

田原地区に係る文化財としては田原住吉神社境内の石槽があげられる。この石槽は花崗岩の巨石を加工した長さ約2メートル・幅約1メートル・高さ約0.7メートルのもので四日市街道工事中、天野川畔から出土し、この地に運ばれたものであり、この石槽と同型のものが大阪四天王寺に現存している。住吉神社境内石槽は昭和48年3月30日に大阪府文化財考古資料第7号として指定されている。又、同境内西側に十三仏がある。十三仏とは死んだ人の初七日から三十三回忌までの十三回の供養する仏達を1枚の板石に刻んだもので、鎌倉末期から十三仏が始まるといわれている。この十三仏は永禄8年(1565)のもので田原地区には照浦野田墓地内十三仏とあわせて2基が現存する。四條畷市内には中野正法寺・中野共同墓地・南野弥勒寺等合わせて7基が知られている。

次に上田原正伝寺別棟堂宇に高さ2メートルの薬師如来が安置されている。この仏像の胸のふくらみ、全体感、衣紋の滑らかさから見て鎌倉時代初期のものとみている。

この薬師如来は、もと「森福寺」と号する上田原所在の真言宗寺院境内にあったことが、天保15年(1844)明細帳に見られ、天文2年(1534)付の「神道移事書」の古文書からみて戦国期の寺院であった森福寺の薬師如来であったことが明らかである。現在は森福寺は廃寺となっている。又、正伝寺には両墓制がある。死者を葬った場所に墓碑を建て、そこを永久に祭りの場とするのを単墓制と呼ぶのに対し、比較的短期間祭りをしただけで近寄ることもせず、祭りをするための墓地を別の離れた場所に設けるのを両墓制と呼んでいる。一般に知られている墓地は単墓制である。



第1図 田原遺跡周辺地形遺跡分布図

- | | | |
|--------------------|---------------------------|----------|
| 1. 照浦野田墓地(両墓制)・十三仏 | 5. 住吉神社境内石槽・十三仏 | 9. 巨石群 |
| 2. 正伝寺薬師如来 | 6. 月泉寺墓地五輪塔 | 10. 石垣遺構 |
| 3. 森福寺跡 | 7. 田原城址 | 11. 石組遺構 |
| 4. 森山墓地(両墓制) | 8. 田原遺跡
(純文早期・古墳・鎌倉時代) | |

両墓制を残す所は全国で約70ヶ所報告されている。大阪では、富田林市、豊能郡田尻、枚方市津田の3ヶ所が数えられているのに対し、当市田原地区には、下田原5ヶ所、上田原に4ヶ所の墓地があって、月泉寺の五輪塔、弗塔墓地以外はすべて両墓制である。

次に田原城は上田原八の坪に所在する標高178.6mの生駒の第1の山脈の西側に突出した部分をたくみに利用したもので、現在はこの城に関する文献資料はほとんど見当らないが、

城郭に関する地名が残されている。その地名と大小字名で「城の下」「門口」「土居の内」「的場」「矢の石」が地元で呼ばれている。

また頂上部の本丸跡にあたるところに現在住吉大神を分祀している館がある。本丸跡は南北約26メートル、東西約7メートルの削平地で本丸跡から田原盆地を一望のもとに見おろすことができる。又、北は眼下に古堤街道で、周囲は谷と川でめぐらし平地との比高差は約30メートル高くなっている。本丸跡の南側に「切り堀り」があり「井戸ヶ谷」へと続く「隠し井戸」と呼ばれる井戸があり、非常用の水利と考えられる。「切り堀り」より西側の畠地が「二の丸」としての性格をもち、当時の居館のあったところと推定されている。又西南隅に突出した丘陵が「西躰」と考えられる。

田原城は田原対馬守を城主としたもので戦国時代の終り頃に近畿の霸をとなえた三好長慶の麾下にあった飯盛城の支城としての機能をはたし、やがて織田信長の統一によって消滅していったものと思われる。

III 調査概要報告

第1次発掘調査

日本住宅公団田原団地建設予定地内の分布調査資料をもとに1~4地点に幅1~2.5mのトレンチを24本設定し、地表下~地山面までの土層堆積の観察、遺構有無の確認、遺構の保存状態の調査を人力において実施した。

第1地点は分布調査において中世の瓦器碗・土師質皿・瓦片等が一番多く採集した、市道辰巳谷線の戎川と交叉地の角堂橋付近に設定する予定であったが、表土下約30cmで地下水が湧き出るため、角堂橋の西約130mの水田地に第1地点として（大字下田原 840番地）南北に幅2.0m長さ24mのトレンチ2本と東西に幅2.0mのトレンチ1本の計3本のトレンチを設定した。

水田西端の南北にトレンチを設定した第1トレンチの層序は、第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層床土、第Ⅲ層は厚さ約20cmの赤褐色砂質土が堆積している。この水田の標高はT.P.144.30mであった。

第1トレンチの東約6mに設定した第3トレンチの層序は第Ⅰ層耕土・第Ⅱ層白褐色砂質土・第Ⅲ層は厚さ約40cmの黒褐色砂質土がトレンチ全域に認められる。この黒褐色砂質土層内からの出土遺物としては、終末期の瓦器碗・土師質小皿・羽釜・摺鉢・練鉢・須恵器が出土しており、室町時代の包含層である。

第1トレンチと第3トレンチの直交する形で幅2.0m・長さ11mの第2トレンチを設定した。その結果第1トレンチで認められなかった室町時代包含層の黒褐色砂質土層は第1トレンチと第3トレンチの中央すなわち、水田の中央部から東にかけて堆積していることが認められた。この第2トレンチから、幅20cm×20cm、深さ20cmのPit2ヶ所を検出した。遺構の検出状況が良好であり、第2次調査において全面発掘調査に切り替えて実施する予定であり、グランドシートを敷き埋め戻し保存した。

第2トレンチで確認した黒褐色砂質土層が東側の一段下った大字下田原768番地の水田にまで堆積しているかを調べるために幅2mのトレンチ3本を設定した。その結果第Ⅰ層耕土・第Ⅱ層灰褐色砂質土・第Ⅲ層灰褐色疊混り層・第Ⅳ層黄褐色砂質土という基本的層序となっており、この水田には室町時代の遺物及び遺構は全く検出されなかった。

第1トレンチにおいて幅20cm、長さ約6.5mの竹と長さ約3mの小枝散が検出されたが、この水田はT.P.142.20mで水放けが悪いために近代頃に目かくし施設を行なったものである。

第2地点は、分布調査において、瓦器碗・土師器・須恵器の散布地として記載されている所であり、生駒山系の谷地形から流れる水は堂尾池の南から流れる水と、上田原レッキス馬場場の方から流れる水が合流する標高T.P.143m~T.P.145mの棚田式に並ぶ水田地に

第1～第5のトレンチを設定した。

標高の高い下田原889番地の水田地に幅1.5m、長さ11.5mのトレンチを東西に設定し、層序は第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層床土・第Ⅲ層褐色砂質土でブロック状に灰褐色粘土層を含む、第Ⅳ層は黄褐色粘質土となる。

地山の比高差は全く認められない。出土遺物として耕土内から染め付けの磁器類が出土している。

第2トレンチは大字下田原890番地に幅1.5m、長さ11.0mの東西に長く設定した。水出面は標高T.P.144.50mで層序は第Ⅲ層厚さ10～30cmの黒褐色砂質土が西から東へ傾斜している。この黒褐色砂質土層内から室町時代の土師質小皿、瓦器碗が出土し、第Ⅴ層の赤褐色粘質土を造構のベース面としてPitを検出した。

この第Ⅴ層の室町時代の造構ベース面になった赤褐色粘質土は厚さ30～40cmで全域に認められた。第Ⅴ層内から、縄文時代早期の押型文土器とサヌカイト片が出土した。

第Ⅳ層下の造構ベース面は黄褐色細砂質土層でベース面は凹凸が著しくトレンチでは縄文時代早期の造構は検出されていないが、第2次発掘調査の全面発掘調査において検出される可能性は大きい。

出土した押型文土器は薄手の楕円文を刻む施文原体を、外面に一定した施文方向をもたず全面に回転押捺文様をした破片である。

現在北河内で発見されている縄文時代早期の遺跡として、交野市神宮寺遺跡、枚方市穂谷遺跡、大東市寺川ができることができるが、近畿地方の数少ない縄文時代遺跡を考える上で田原遺跡の縄文式土器は貴重な資料であると考えられる。

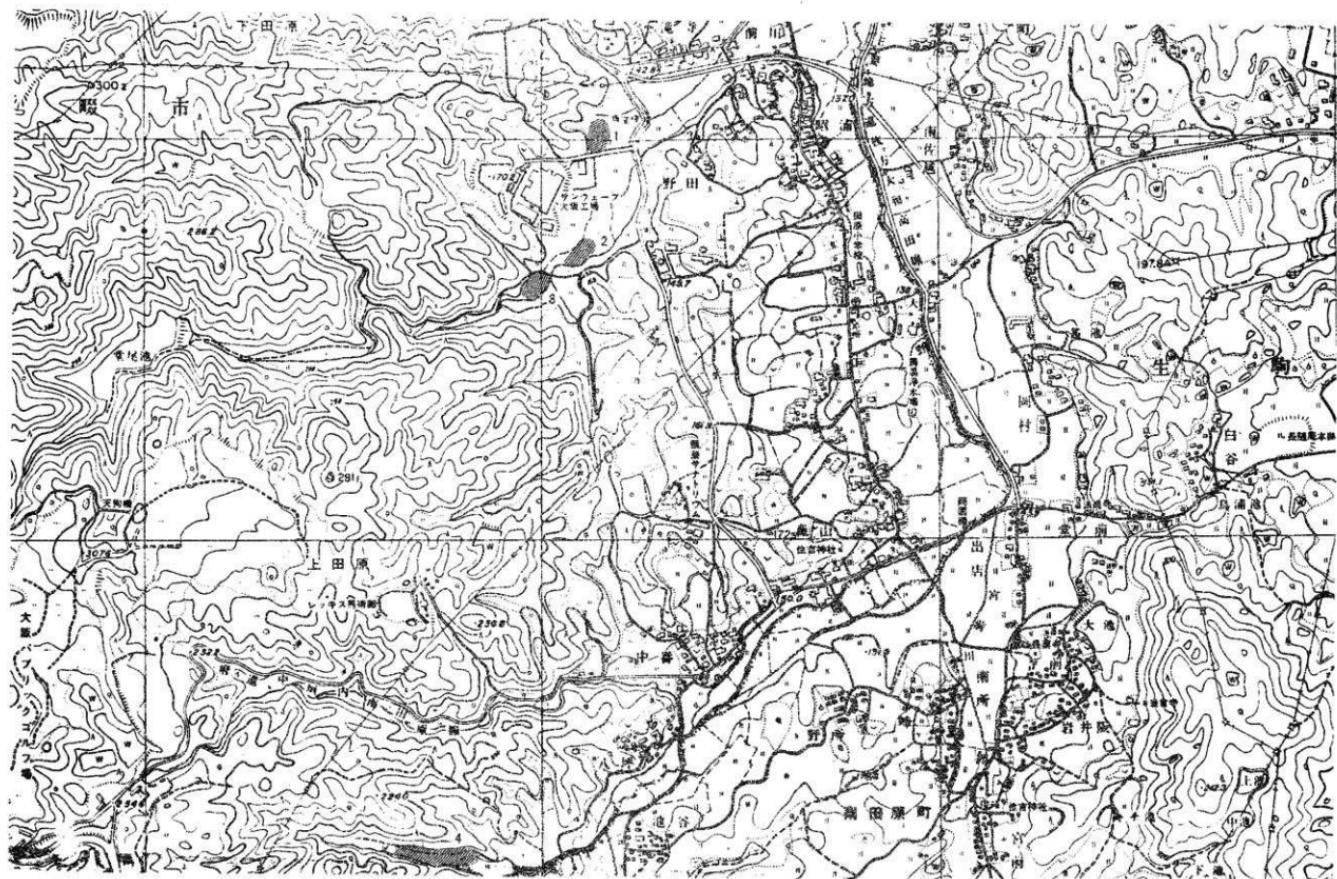
第3トレンチは大字下田原891番地の三角形を呈する水田地に幅1.5m、長さ4.30mのトレンチを設定した。

その結果、第Ⅲ層は厚さ約10～20cmの暗褐色砂質土、ブロック状に厚さ10cm程度の白褐色細砂・褐色細砂・暗褐色砂層を含み、第Ⅳ層は厚さ50cmの黒褐色疊混り砂層が堆積している。このトレンチにおいては第2トレンチにおいて検出した縄文時代包含層の赤褐色粘質土層、及び室町時代包含層黒褐色砂質土層は全く検出することはできなかった。

第Ⅲ層から砂層がブロック状に堆積しているのは流れ込みによる堆積と考えられる。又、このトレンチ内からの出土遺物は見い出しができなかった。この調査地の南側に流れる戎川が両谷間から流れる合流地近くにあるために幾度となく地形を変え堆積したものと考えられる。

第4トレンチは大字下田原892番地の水出地に幅1.5m、長さ6mのトレンチを設定、水出面は標高T.P.143.30mを計る。

層序は第Ⅲ層に厚さ約10cmの白褐色砂質土、第Ⅳ層は厚さ2～10cmの白色砂層、第Ⅴ層



第2図 第1次調査位置図

1 : 10000

は厚さ10cmの褐色細砂層、第VI層は厚さ10~20cmの褐色砂質土、第VII層灰褐色粘土、第VIII層黒褐色砂質土が堆積しており各層は西から東へと傾斜し、特に地山面は約50cmの比高差が認められた。

このトレンチの地山直上において、室町時代包含層の黒褐色砂質土層が検出したが出土遺物は全く認められなかった。

第VIII層より上層において砂層は戎川が中世以降に氾濫した流れ込み堆積と考えられる。

第5トレンチは大字下田原893番地の水田地に幅1.5m、長さ13.5mのトレンチを設定水田面は標高T.P.143.0mを計る。

層序は第I層厚さ約20~30cmの褐色砂質土、第IV層厚さ約30cmの灰褐色砂質土で、第IV層上面と第V層下面に白褐色砂がブロック状に含まれている。第V層厚さ約20cmの灰褐色粘土層が第4トレンチ同様流れ込み堆積層と考えられる。

トレンチ内からの出土遺物を見い出すことはできなかつた。

第3地点は分布調査において土師質皿、須恵器の散布地として記載されている所である。第3地点は戎川上流の右岸の水田地標高T.P.146.80mの水田地に4本のトレンチを設定東端の第1トレンチは幅1.5m、長さ13.0mのトレンチを設定第I層耕土、第II層床土・第III層厚さ約20cmの黒灰色シルト層、第IV層厚さ約20cmの灰緑色シルト層で、この水田は谷地形になっており、又、戎川上流の右岸と合わせて水放げの悪い水田であった。

第V層下にφ125mmの陶管が検出され地主の東山広雄氏の教示によると、水放げが悪い為、陶管を埋設したとの事であった。

第1トレンチの西側に幅2m、長さ23mの第2トレンチを設定、その結果第III層白褐色砂層下において、畦状遺構が検出した。

畦状遺構は幅20~30cm、高さ約10cmの黒褐色粘質土層が置かれている。

遺構はトレンチ内に13本南北に設置されている。13本の間隔は、約1.4mの等間隔であり、遺構検出面において染め付け磁器、及び天目茶碗が出土している。

出土した土器から近世に排水を考えた施設と考えられる。

第3トレンチは第2トレンチの西側水田に、幅1.5m、長さ28.60mのトレンチを設定、第I層厚さ20~30cmの赤褐色砂層でトレンチ東側において、この赤褐色砂層を切り込んで赤褐色粘土及び灰褐色砂層が堆積している。東に進むにつれて耕土下で灰褐色砂層、褐色細砂層、白褐色砂層、茶褐色砂質土層、黒褐色砂層、赤褐色粘土層等の砂、粘土が交互にブロック状に含まれ、川による流れ込み堆積である。

第4トレンチは生駒山系の山裾に、幅1.5m、長さ12.8mのトレンチを設定した。層序は、第III層赤褐色粘土で厚さ約20cmの堆積で、第IV層は白褐色砂質土、第V層は褐色粘土、

第Ⅳ層は黄褐色粘土で地山に達する。第Ⅲ層の赤褐色粘土層が大字下田原 890 番地の第2トレンチで検出した縄文時代早期の包含層に類似しているが、土器、石器等の出土がなかった。

第4地点は、分布調査において、土師器、須恵器の散布地として記載されている所である。場所は、大字上田原八の坪の田原城跡の南側を通る里道を進む最奥地、奈良県と大阪府の県境にあり、谷間地形の荒地に9本のトレンチを設定した。

この第4地点では、9枚の棚田式に並ぶ水田地及び荒地であって、冬期には短時間しか直射日光を浴びることが出来ない場所である。

棚田式に並ぶ水田地東側より順次にトレンチを設定した。

第1トレンチは標高T.P.176.60mの水田地に幅1.5m、長さ8mの第1トレンチを設定した。層序は第1層耕土・第Ⅱ層厚さ約30cmの褐色砂質土、第Ⅲ層厚さ約20cmの褐色粘質土が堆積し地山となる。第1トレンチからの出土遺物を見い出すことはできなかった。

第2トレンチは第1トレンチの西側2枚目の水田に幅1.5m、長さ8.5mのトレンチを設定した。層序は第Ⅲ層厚さ約60cmの褐色砂質土、第Ⅳ層は厚さ30cmの黄褐色砂混り層が堆積している。トレンチ西側で幅3.8m深さ25cmの溝状遺構が検出した。又トレンチ東端で花崗岩の石組遺構が検出した。この石組は先にも述べた溝状遺構の肩部に設いているものである。

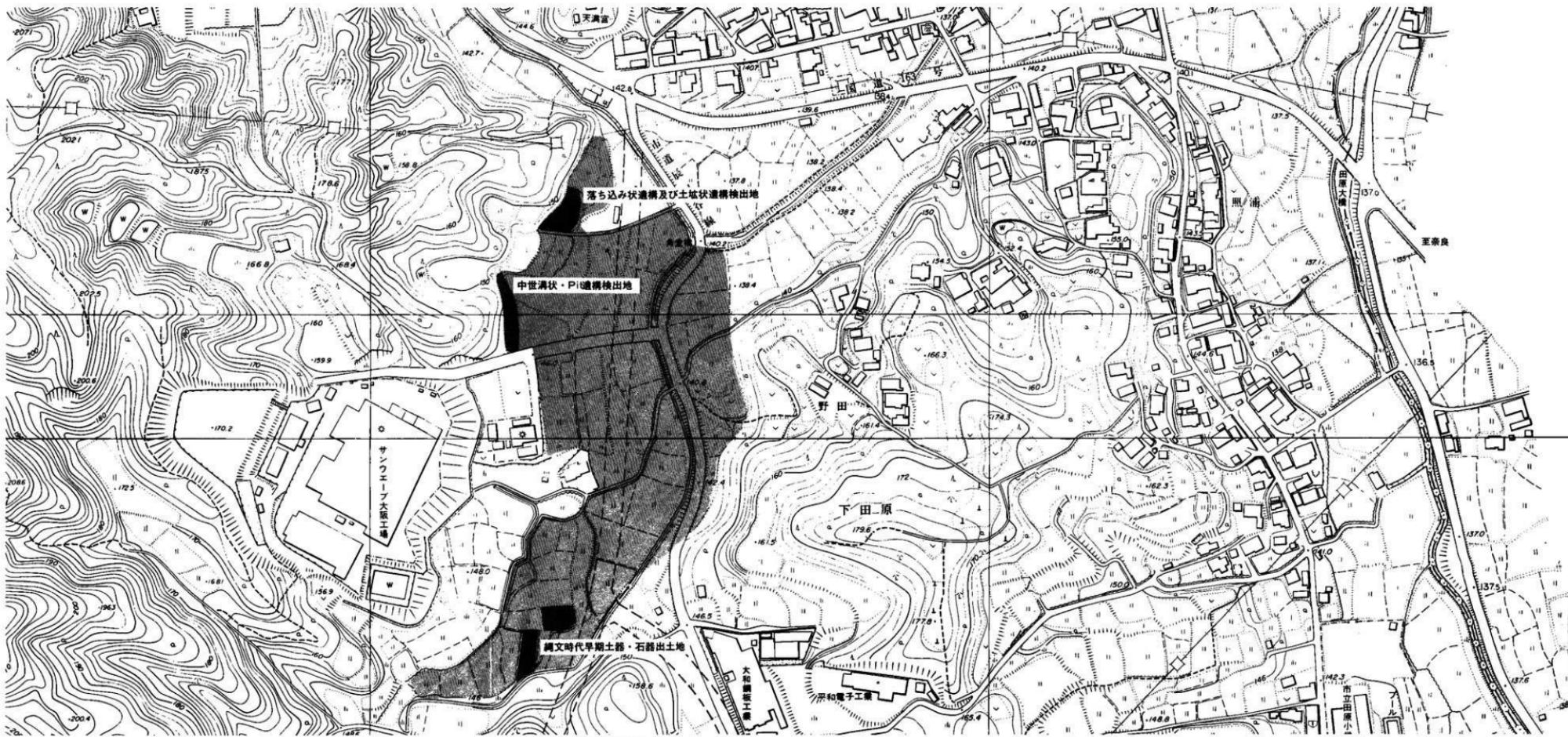
第3トレンチは標高T.P.177.70mの荒地に幅1.4m、長さ6.2mの東西方向にトレンチを設定した。層序は第Ⅱ層褐色砂質土、第Ⅲ層厚さ約30cmの赤褐色粘質土、第Ⅳ層は厚さ約20~30cmの灰褐色砂質土が堆積している。第Ⅳ層内から拡大の花崗岩が検出した。

又、地山直上において花崗岩の石組遺構が検出した。石組の北側には枝木を壙状に置いたものでトレンチの一端で確認することができた。第2次調査以降の全面発掘調査で全容を明らかにする。第Ⅲ層から土師質小皿、瓦質土器、摺鉢、須恵器が出土している。

第4トレンチは標高T.P.178.30mの荒地に幅2.5m、長さ5mのトレンチを東西方向に設定した。層序は第Ⅲ層厚さ約20cmの黄褐色粘質土、第Ⅳ層は厚さ20cmの赤褐色細砂層が堆積し、第Ⅳ層下の赤褐色粘土層幅40cm、深さ15cmのU字状の溝状遺構を検出した。

溝状遺構の堆積は黒灰褐色砂層中には、サクランボ木を敷きつめたもので、水路排水施設と考えられる。又、溝状遺構中央部に幅1.8m深さ25cmの落ち込み状遺構が検出した。遺構中央に幅60cmの花崗岩が置かれており、中から瓦片が出土した。又、溝状遺構周辺から3ヶ所のPitも合わせて検出した。

第5トレンチは標高T.P.189.30mの荒地に幅1.5m、長さ11.0mの東西方向にトレンチを設定した。層序は第Ⅰ層表土、第Ⅱ層床土、第Ⅲ層は厚さ約20~40cmの灰褐色砂質土、第Ⅳ層は厚さ約20cmの暗褐色砂質土で地山に達する。第Ⅲ層内から土師質小皿口縁部、第Ⅳ



層内から瓦片がそれぞれ出土している。

第6トレンチは標高T.P.189.80mの荒地に幅1.5m、長さ5.3mのトレンチを設定した。層序は第I層表土、第II層灰褐色砂質土、第III層内に褐色砂層がブロック状に入り込んでいる。第IV層は灰褐色細砂、第V層褐色礫混り層、第VI層青色シルト層である。

第II層内から、土師質皿、磁器が出土している。

第7トレンチは標高T.P.181.80mの荒地に幅1.5m、長さ6mのトレンチを設定し、層序は第II層厚さ約15~20cmの灰褐色砂質土、第III層は厚さ約15cmの白褐色細砂、第IV層青灰色砂層で地山に達する。第II層内から磁器、土師質皿、瓦片、第III層内から砥石がそれぞれ出土している。

第8トレンチは標高T.P.182.30mの荒地に幅1.5m、長さ8mのトレンチを設定した。層序は第7トレンチと同様であるが、第II層内に赤褐色砂質土、白褐色砂層、赤褐色砂礫層がそれぞれブロック状に入り込んでいる。

出土遺物は第III層内から土師質小皿が出土している。

第9トレンチは標高T.P.186.60mの今回の調査地の最西端の荒地に幅1.0m、長さ16mの東西方向にトレンチを設定した。

層序は第II層灰褐色砂質土上にブロック状に褐色砂層及び、黒灰褐色砂質土層が入り込んでいた。トレンチ西側で幅1.1m、深さ25cmの溝状遺構が検出し、遺構内には緑灰色粘質土層及び黒灰色砂質土層が堆積していた。又トレンチ中央部には幅1.8mの円形を呈すると思われる落ち込み状遺構を検出した。遺構内から花崗岩の石14個検出した。この花崗岩は一部焼けている。又、土師質小皿、瓦、磁器が出土している。

第4地点が検出した溝状遺構・落ち込み状遺構等の遺構は、出土遺物からみて、室町時代~近世に至るものと考えられるが、今後の全面発掘調査において明確に時代決定されると思われる。

第2次発掘調査

第2次発掘調査は、日本住宅公団が田原団地建設に係る戎川改修と市道辰巳谷線の路線変更地を中心に第1次調査が検出した遺構及び出土遺物のあった場所の全面発掘と戎川改修ルート及びその周辺の水田に54本のトレンチを実施した。(第3図参照)

本概要報告書においては、調査断面図をすべて図化することは不可能であり、田原団地建設に伴なう調査完了時の報告書に挿入するものである。

ここでは、調査において検出した遺構遺物について報告し、トレンチ部の調査結果は本文中に簡単にまとめて報告するものとする。

市道辰巳谷線と戎川との交叉地の角堂橋の西120mの生駒山系東傾斜面山根の標高T.P.144mの水田地に幅5mトレンチを設定したところ、地表下50cmに土壤状遺構が検出したため、

この水田を全面発掘に切り替えて行なった。この水田地において検出された遺構は土壤状遺構3ヶ所、掘立柱建物跡、落ち込み状遺構等が検出した。

土壤状遺構（第4図・図版6）

水田の北端に検出した土壤状遺構は幅東西2.25m、南北2.45m、深さ約40cmの規模で、褐色砂質土層が堆積していた。

土壤状遺構内から土師質皿・羽釜が多量に出土し、又同時に鉄製品1点も出土している。土師質小皿出土量の約半数以上が完形品であり、土器形成からみて瓦器碗が共伴しないことから15世紀前半に属すると思われる。

掘立柱建物跡（第4図・図版2）

土壤状遺構と落ち込み状遺構の中間に掘立柱建物跡が検出した。

検出されたPitからみて2間×3間の掘立柱建物で長軸は南北方向に建てられていた。

Pit内からも土師質小皿が出土し土壤状遺構と同時期のものである。

落ち込み状遺構（第4図・図版2～4）

掘立柱建物跡の南側に検出した落ち込み状遺構はこの水田地より南側の里道にまで広がるが隣接農耕地への影響を十分配慮して調査グリットの設定を行なった。

調査グリットで検出された落ち込み状遺構の規模は幅11.6m、肩部からの深さ2.6mを検出した。落ち込み状遺構内の層序は第6層厚さ約20～60cmの淡褐色砂質土・第7層厚さ30～40cmの青白色砂層・第8層は厚さ40～70cmの青灰褐色砂質土で第8層内に暗灰色砂層及び白褐色砂層がブロック状にそれぞれ堆積している。第9層はブロック状に青灰色砂質土が第10層では厚さ40cmの青灰黒色砂質土・第11層厚さ20cmの赤褐色砂質土(腐蝕土)・第12層厚さ20～60cmの赤褐色砂質土・淡黒褐色砂質土がそれぞれ堆積し、第13層は厚さ70cmの淡黒褐色砂層・第14層は落ち込み状遺構の肩部に約10cmの青褐色砂層・第15層の最下層は厚さ35cmの白褐色砂粒層が、それぞれ堆積している。

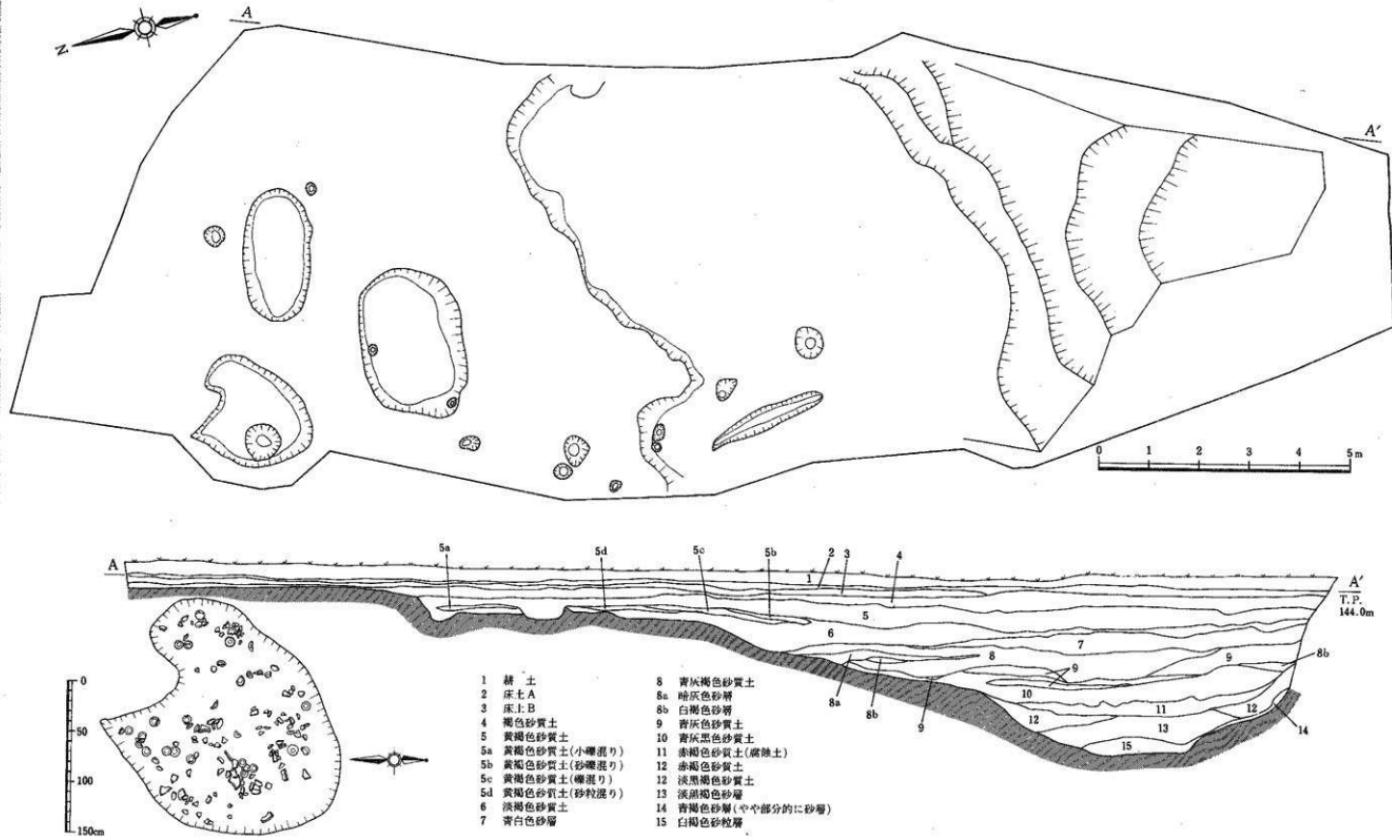
耕土は標高T.P.144.30mで、落ち込み状遺構最下層の地山面はT.P.140.66mで、耕土下3.64mで地山に達する。

次に各層序からの出土遺物としては、第7層から摺鉢、第9層から土師質小皿、摺鉢、瓦質土器、第10層から土師質小皿、瓦器碗(第9図-69～75)瓦器皿(第9図-59～60)瓦質土器、羽釜、摺鉢、ねり鉢、瓦等が多量に出土している。

第11層は羽釜が出土し、同一層内に幅60cmの大木が検出した。

第12層は羽釜・摺鉢、第13層は、羽釜が出土している。この層内には腐蝕で幅50cmの大木1本と多量の櫻の葉が出土している。

第15層、最下層より羽釜・須恵器口縁部が出土した。又、第10層の出土遺物面には、花崗岩の石組遺構(図版6)が検出した。



第4図 落ち込み状造構及び土壌状内出土遺物平面実測図

造構の規模は、幅6.5mの円形を呈する落ち込みでその中に40~100cmの花崗岩を円形に置いている。又、円形に置かれた石組の中央に幅100cm、深さ30cmの円形の穴を掘り込んでおり、石組の井戸状造構とも考えることができる。

この落ち込み状造構の上限は出土遺物からみて、12世紀の中期~後期とすることができる。

又、落ち込み状造構が埋められた時期は、落ち込み状造構北側の肩部から北に5.5mの所にPit及び、落ち込みが検出している。

断面観察からみても落ち込み状造構の上層の第5層黒褐色砂質土が、落ち込み及びPit内に堆積している。

又落ち込み肩部から羽釜及び瓦器碗(第9図-61~66)が出土している。この瓦器碗は終末期の瓦器碗であり、時期的には14世紀代とみることができる。

この落ち込みを切り合つように検出した掘立柱建物跡及び土壤状造構には、先にも述べたように瓦器碗を全く含まれておらず、又、層序からみても落ち込み及びPitが埋められた後の第4層黒褐色砂質土である。

以上のことまとめると、大雑把に落ち込み状造構が12世紀中期~後期につくられ、13世紀に堆積している。

落ち込み及びPitは14世紀代に、掘立柱建物跡及び土壤状造構が14世紀末か15世紀に推定したい。

溝状造構(第5図下段)

次に大字下田原840番地の水田地の全面発掘調査地で第一次発掘調査の第一地点において検出したPit2ヶ所と第Ⅱ層の黒褐色砂質土の遺物包含層の堆積地の全面発掘調査であります。幅23m×6mのグリットを設定して調査を設定した。

区画設定は東西の中心をCラインとして1m区画で東から、Aライン、Bラインと横軸を命名し、南北縦軸は北端から1m毎に算用数字の01、02、03……023をあてて区画を設定した。調査区東端のAラインの基本層序は第一次調査と同様上から第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層床上、第Ⅲ層黒褐色砂質土が堆積している。

調査区12ラインで約30cmの地山比高差が認められた。検出された造構は、第5図下段に示したように調査区東側のAラインとDラインに溝状造構が、Bライン、Cラインと012ポイント~016ポイントにPit群が、Eライン03ポイント~05ポイントに土壤状造構がそれぞれ検出された。

Aラインに検出した溝状造構は、推定で幅約1~1.2m、長さ11.0m、深さ約20cmを測る断面はU字状を呈している。

造構肩部の標高は、T.P.143.70mで底面での南端と北端との比高差は約15cmで全体に北から南に少しではあるが傾斜している。覆土は黒褐色砂質土層であり、出土遺物は高台を全くもたない瓦器碗、土師質小皿、羽釜、鋤鉢、練鉢がそれぞれ出土している。

又、Dラインの03ポイント～011ポイントに検出した溝状遺構は、幅60cmで011ポイントにおいて東に曲がる形で検出した。

遺構肩部は標高T.P.143.80mで底面での南端と北端との比高差は約10cmで、全体に北から南に少しはあるが傾斜している。覆土は黒褐色砂質土層で出土遺物は、土師質小皿が出土している。

Pit群については、合計9ヶ所のPitが検出し、Pit肩部は標高143.70mで、深さ約10cm前後であった。Pit内から小片であるが、土師質小皿、瓦器碗がそれぞれ出土している。検出された各遺構の深さは10～15cmでありなく、耕土及び床土内から近世の陶器片が数点出土していることから以前に削手されたと思われる。各遺構の時期は貼り付け高台をもたない終末期の瓦器を共伴することから、14世紀代と推定している。

縄文時代早期遺構（第5図～第8図・図版7～8）

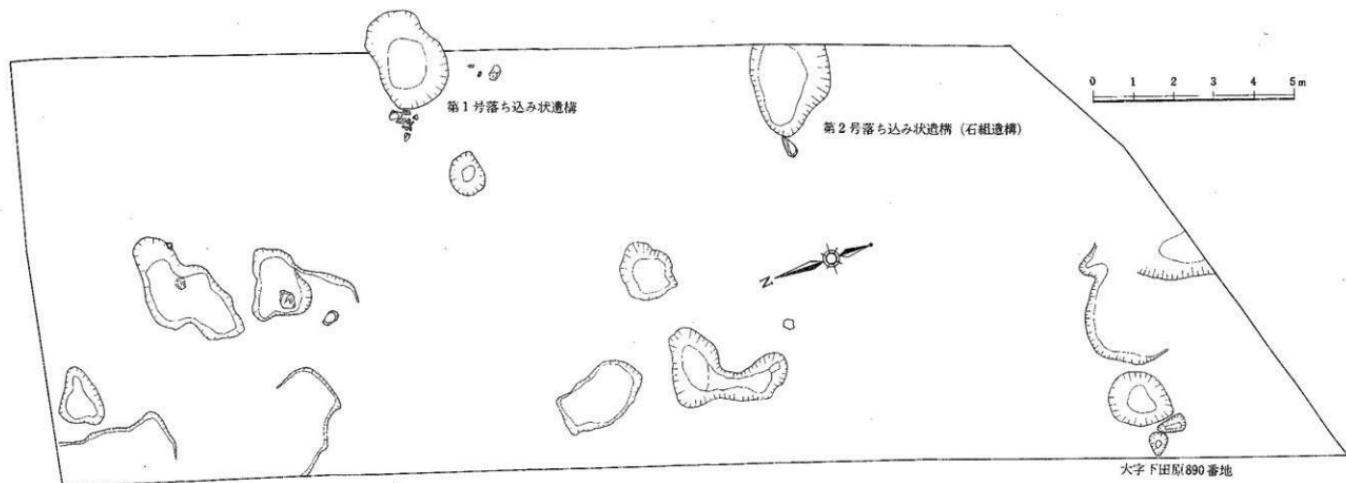
大字下田原890番地の水田地の全面発掘調査地で、第1次発掘調査の第2地点第2トレンチで出土した縄文時代早期の押型文土器とサヌカイト片が出土した場所の全面発掘調査である。

第1次発掘調査でも述べたように第2地点第2トレンチ以外の第1トレンチ第3トレンチ～第5トレンチにおいては全く縄文式土器及び石器が出土しなかったが、大字下田原890番地と北側の大字下田原854番地の水田には縄文式土器、石器が出土した。すなわち日本住宅公団田原団地建設予定地内においては、上記の854番地と890番地の2枚の水田のみ縄文時代早期の土器、石器が出土している。

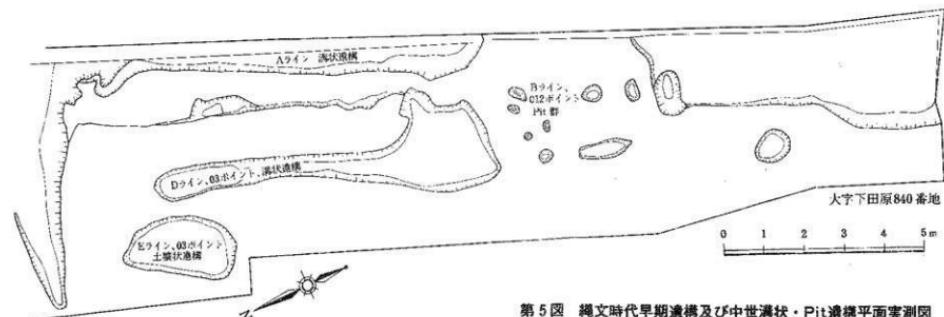
縄文時代早期の出土した水田は戎川の北側に隣接するものであり、下田原889番地～下田原893番地の5枚の棚田式の水田地である。水田地の標高は下田原889番地はT.P.145m、下田原890番地はT.P.144.50m、下田原891番地はT.P.143.50m、下田原892番地はT.P.143.30m、下田原893番地はT.P.143.0mをそれぞれ計る。

戎川の水面は、T.P.142.50mを計り、現在の川筋は一部コンクリートによって堰を設けて水量を調節しているが、縄文時代～中世に至る時期の戎川の流れは、下田原890番地南側の位置の戎川は全く変わっていないが雨量の多い時には下田原892番地、及び下田原893番地においては、第1次発掘調査の断面でも明らかなように氾濫による堆積が数回にわたって認められた。すなわち、下田原890番地及び、下田原854番地等の場所は、縄文時代早期の人々にとって、洪水の危険の少ない比較的高燥な地点にあることがわかる。西側及び南側については、生駒山系の山々が続き、南側には谷間から流れる水があり、縄文時代の狩猟生活には絶好の場所であったに違いない。

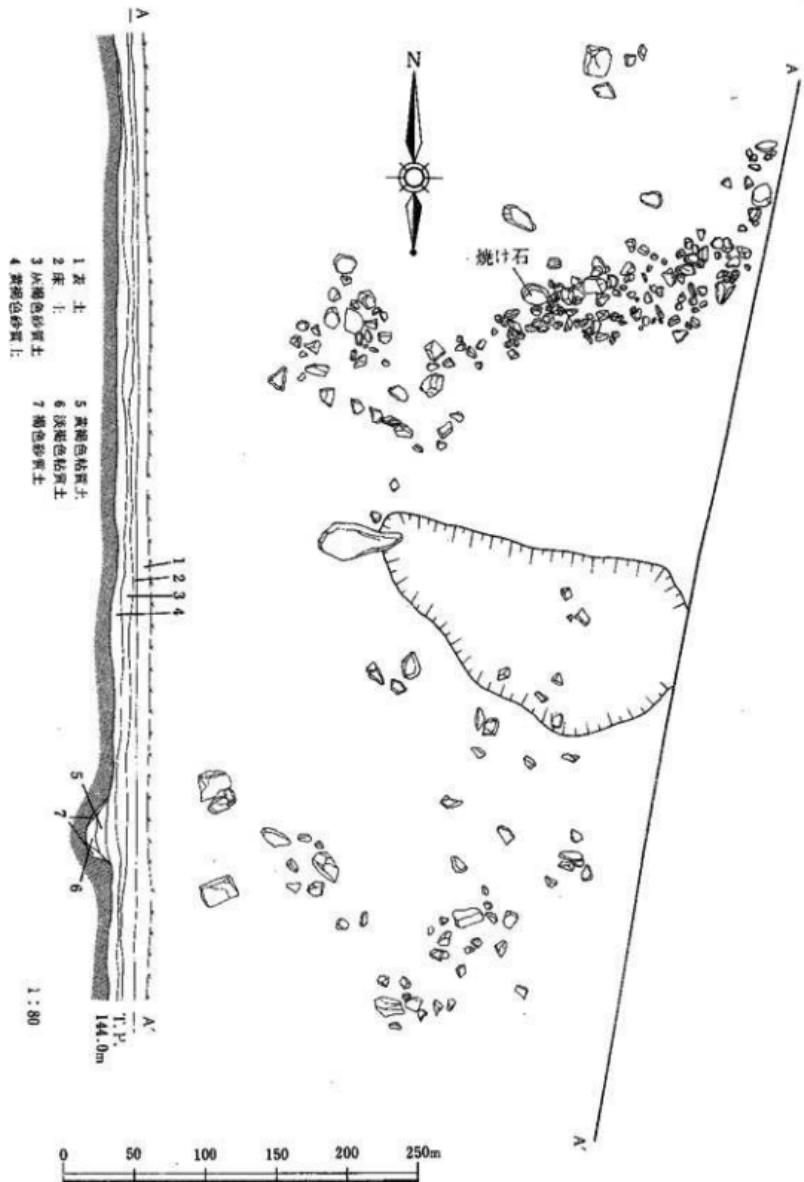
縄文時代早期の押型文土器及び石器出土地の基本層序は、第Ⅰ図に示したように、第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層床土、第Ⅲ層黒褐色砂質土、第Ⅳ層赤褐色粘質土、第Ⅴ層暗褐色砂質土、



大字下田原890番地



第5図 繩文時代早期造構及び中世溝状・Pit造構平面実測図



第6図 縄文時代早期石組遺構平面実測図

黄褐色細砂質土となっている。第Ⅳ層内から土師質小皿、瓦器碗、羽釜、摺鉢が出土している。第Ⅳ層の赤褐色粘質土上面を造構ベース面となっている。第Ⅳ層の赤褐色粘質土から縄文時代早期の押型文土器が出土した。第Ⅴ層は、縄文式器及び、石器類が全く含まれておらず地山であると考えられる。第Ⅴ層上面が縄文時代の生活面であるが、第7図の断面図を見てもわかるように地山面が凹面を呈している。



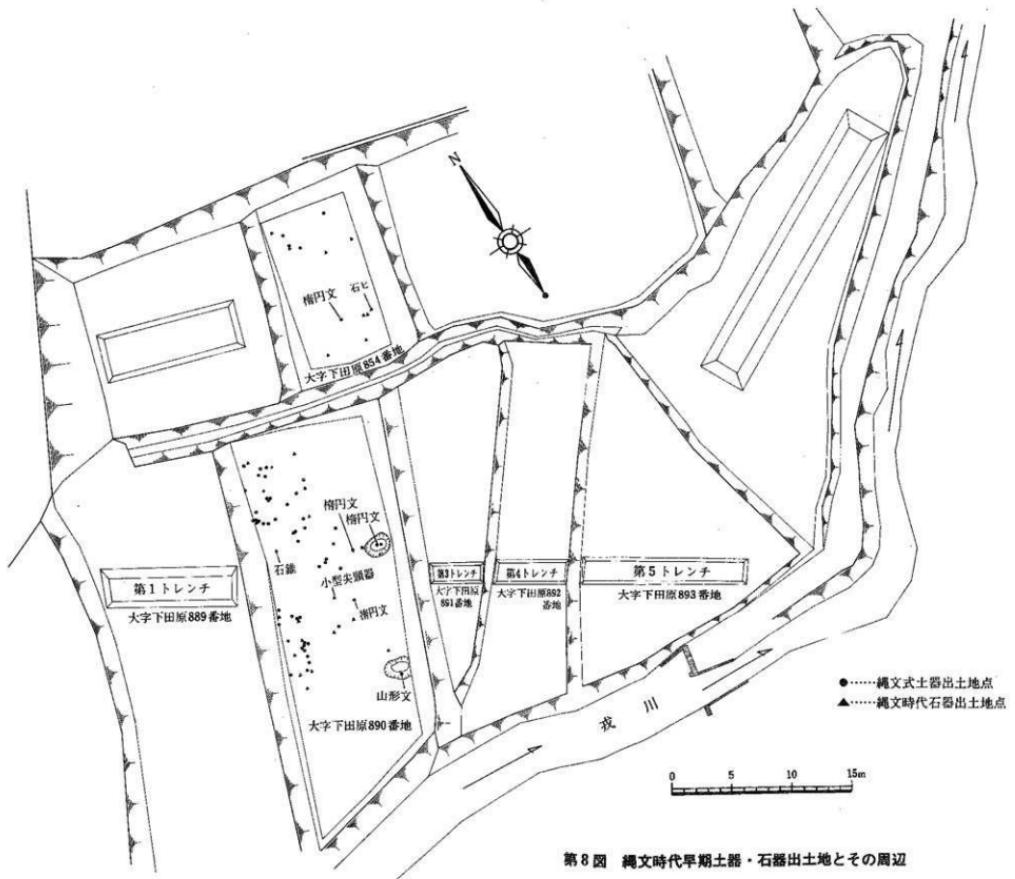
第7図 縄文時代早期の土器・石器出土地の断面実測図

次に、第5図の縄文時代早期遺構の平面実測図を見てもわかるように東側端に検出された、東西幅2.4m、南北幅1.7m、深さ80cmの第1号落ち込み状遺構と、東西幅2.0m、南北2.0m、深さ70cmの第2号落ち込み状遺構の規模であるが、後者の第2号落ち込み状遺構の外側に、拳大の花崗岩約230個が出土した（第6図・図版8）出土状況は、落ち込み状遺構の北側については定形化した半円形に近いに対し南側は散乱して検出されたが、全体として遺構を取り囲むような石組であると考えられる。この石組の北側に焼け石（20×15のほぼ円型を呈する）が出土した。この石組内の炭は全く検出されておらない。

この調査地区全域から、条痕文の縄文時代の土器が出土しているが、この石組の落ち込み状遺構内から、楕円文と山形文の上器が出土している。又、石組内からも石器が出土しており、この2ヶ所の落ち込み状遺構は、縄文時代早期の押型文土器を共伴する時期の遺構である。

先にも述べたように地山面が凹を呈しており、第5図上段において土壌状遺構及び、Pit状遺構のように思われる凹みが検出している。深さは10～20cm位であり、中には花崗岩の石が1個～2個置いている。これらの凹みは時期的には縄文時代早期の面であり、縄文時代の遺物以外の土器は全く含まない。

本調査区では、第Ⅳ層において押型文土器と条痕文土器、石器を中心とした縄文時代遺物の出土であって、第8図で示したように、第2号落ち込み状遺構より北側の方に土器、石器が出土している。特に下田原890番地内の北側に出土している土器は条痕文及び、過擦文の土器の出土で楕円文、山形文の土器は含まれていない。土器については、ローリングを受けておらず、胎土については楕円文土器は薄手で褐色を呈して、焼成は良好であるのに対し、条痕文土器及び、過擦文の土器については厚手で、色調は淡褐色で胎土には角閃石、金雲母を含む生駒西麓の胎土で製作されている。



第8図 縄文時代早期土器・石器出土地とその周辺

第1号落ち込み遺構検出の上面から、第11図-76・図版18-76の弥生式土器1点が出土している。この弥生式土器は、今日畿内第1様式に分類されるはりつけ突帯に刻み目をもつ弥生前期の新段階の壺である。この壺は畿内北部に共通する特色をもつ摂津の土器であり、今回の出土は1点だけであったが西側の住宅公園田原団地範囲外に今後出土する可能性が出てきている。出土した土器からみてこの田原の他にも地域間の交流が比較的活発に行なわれていたと思われる。

IV 出土遺物

概観

今回の調査で出土した遺物は、縄文式土器、石器、弥生式土器、中世遺物、近世遺物など全面発掘調査を行なった場所からかなりの量にのぼる。特に大字下田原 890 番地を中心に出土した縄文式土器、石器は縄文時代早期の一括資料として重要なものである。ここでは調査概要報告に従って、出土した遺物を説明することにする。

土師器（第9図-1～55・図版10～12）

土師器の皿は小型のいわゆる燈明皿と、中形の皿が出土している。小型の皿の一部に油かすが付着し、燈明皿であったことを裏付ける資料も出土している。底部中央がやや上げ底気味のものと、そうでないものの二種ある。口縁部は丸味をもって終わる、口径はいずれも 8 cm 強である。

土壤状遺構及び、落ち込み状遺構出土

瓦器（第9図-56～75・図版13～17）

瓦器は落ち込み状遺構を中心に出土している。器種は 2 点の小皿を除いてすべて椀である。ここではタイプ別に分けて説明する。

瓦器椀 A（第9図-67～75）

口縁端部は外反する蝶形を呈し、端部内面には 1 本の沈線がめぐる高台は断面が三角形を呈するものと台形を呈するものがある。高台の貼り付けは比較的しっかりしており、内・外面に暗文を施し、見込み部に連続輪状文をもつ。下田原 746 番地落ち込み状遺構出土

瓦器椀 B（第9図-62、65～66）

口縁端部内面には 1 本の沈線がめぐる、高台は退化してわずかに残存するが高台としての役を果すものは少ない。高台は断面三角形を呈する。62、66は、外面にわずかな暗文をもつ、66は見込み部に連続輪状文をもつが、62、65は全く連続輪状文をもたず暗文だけが施されている。下田原 746 番地溝状遺構出土

瓦器椀 C（第9図-57～58、61、63～64）

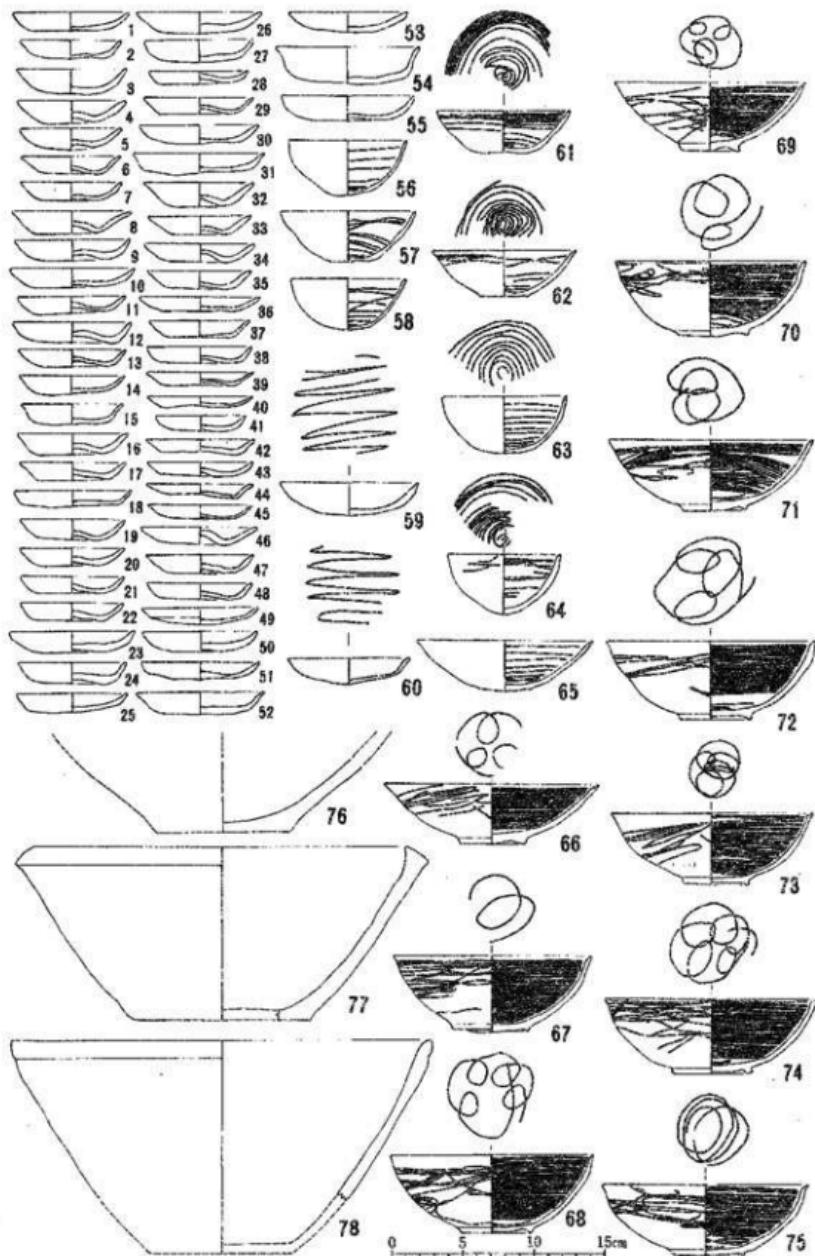
高台が完全に退化したもので、口縁端部は丸味をもって終わるものである。内面には、粗くてうすい蝶形の暗文がめぐる。下田原 746 番地溝状遺構上面出土

瓦器皿（第9図-59～60）

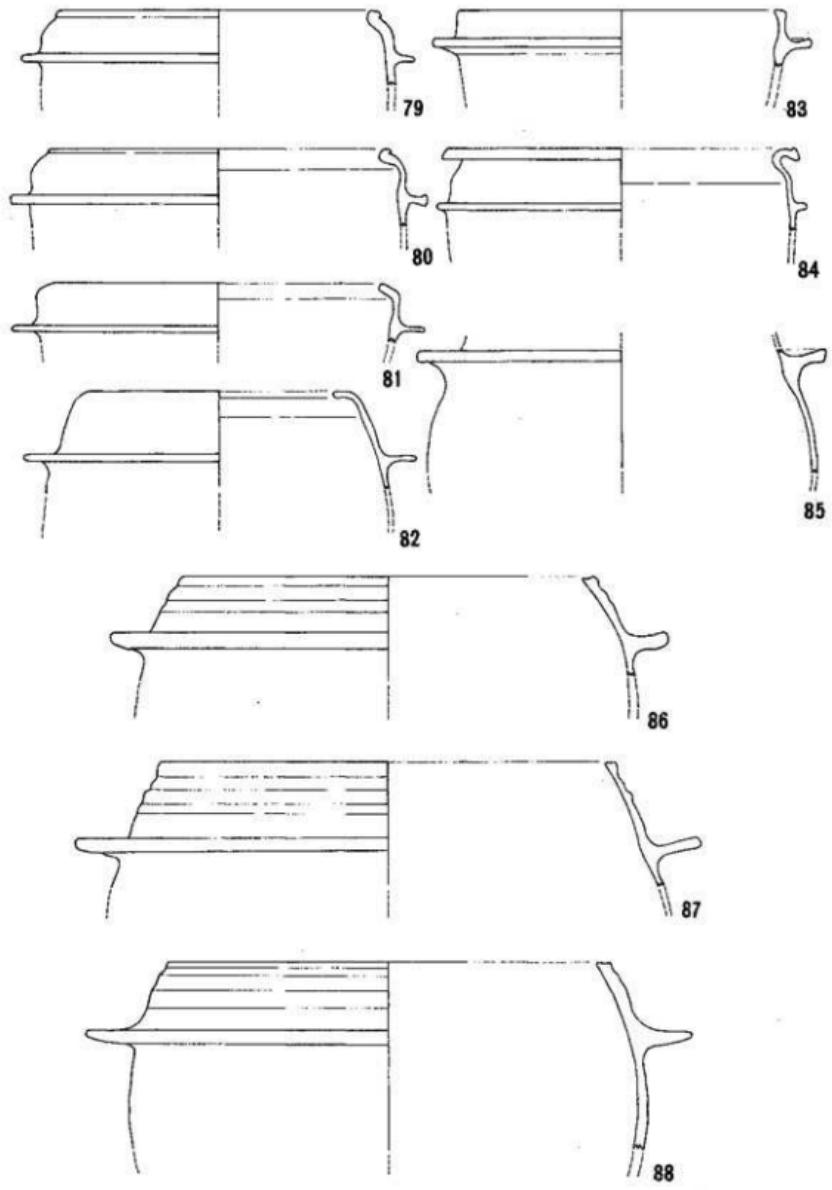
わずかに外反する口縁部をもつ、口縁端部は角張って終わる。見込み部にヘアピン形の暗文をもつ。全体にヨコナデで丁寧に仕上げている。落ち込み状遺構出土

縁鉢（第10図-76～78）

76・78は瓦質で薄手で内面に 7 条溝が施している。又、77はやや厚手の備前焼で内面に



第9図 出土土器実測図・I



第10図 出土土器実測図・II

6条溝が施している。

羽 篦 A (第10図-79・84)

土師質で口縁部が外反し、端部にわずかに内面に肥厚するものである。

胎土は粗い砂粒を多く含む。

羽 篦 B (第10図-80~82・図版18)

土師質で、口縁部は内反する。口縁端部は外側に折れまげるもの80と口縁部が内反して丸く終わるもの81・82で鋸はほぼ水面につくられている。内面は横ナデで、仕上げている。

羽 篦 C (第10図-83・図版18)

瓦質でやや内傾する口縁部で端部が角張って終わるもので鋸は上向きにつくものである。

羽 篦 D (第10図-85・86~88)

いづれも瓦質で、内傾する口縁部の外側に3・4本の棱をもつものである。

口縁端部は面をつくって終わる。

85は、腹部の破片で、内面をハケ目で調整している。

88は、鋸より下の外面をヘラ削りで仕上げている。鋸はほぼ水面なもの86・87と85・88は上向きのものがある。鋸より下半は焼が厚く付着している。

砾 石 (図版28-45~50)

45は横断面が長方形を呈し、うち三面が使用によって平滑になっている。46は横断面が長方形を呈し、うち一面が使用によって平滑になっている。47は横断面が四角形を呈し、うち四面とも使用によって平滑になっている。使用面の一部及び側面に焼が付着している。

48は横断面が四角形を呈し、うち四面とも使用によって平滑になっている。49は横断面が台形を呈し、うち三面が使用によって平滑になっている。50は横断面が四角形を呈し、うち三面が使用によって平滑になっている。

その他の遺物 (図版19)

上記の他に、磁器、石鍋が出土した。磁器には、わろし皿、大口茶碗、青磁の破片が、それぞれ出土している。

石鍋は、口縁部3点が出土している。いづれも滑石製で色調は灰色、青色、赤褐色を帶びている。口縁部直下に鋸状の突帯を創出されており、中には鋸状の突帯を削り取り、突帯下に、7mmの両面から穿孔した穴があり二次加工品である。

弥生式土器 (第11図-76・図版18)

法量は、現存高22.3cm、胴部最大径23.0cm、底径7.8cmで、胴部中央に最大径を有し、胴部より頸部にかけて、3条・6条の貼り付け突帯に創み目をもち、外面胴部に、ハケ目を施し、胎土は緻密であり、焼成は良好で色調は内、外面ともに褐色を呈している。畿内北部に特徴をもつ摂津の土器であり、唐古第1様式(新)の時期のものである。

石器及び縄文式土器においては、第V章の田原遺跡出土の縄文時代遺物についての項に説明する事にする。

V 田原遺跡出土の縄文時代遺物について

四條畷市田原の東部山地にその源をもつ戎川は、下田原の丘陵の間をぬって天の川に合流している。花崗岩を基盤とする東部山地がなだらかになり、やがて下田原の耕地がひらける戎川左岸、標高144mの微高地に所在するのが田原遺跡である。

日本住宅公団の開発に先行して、昭和54年にこの地域の発掘調査が行われたのであるが、この遺跡からは縄文時代に属する土器、石器ならびに石組の遺構が検出された。調査では遺跡地の全面発掘が行われたのであったが、遺物の包含地層は南北43m、東西13mの範囲にわたっており、表土20cm床土10cmを掘下げ、更に黒褐色砂質土20cm~50cmをとり除いた後の赤褐色でや、粘土まじりの砂質土層30cm~60cmが包含層となっていた。

この地点は一段下の耕地が砂層入りまじりの層位であるのに比して、比較的安定した様子をうかがうことができ、戎川の氾濫においてもその影響を受けることが少なかったものと考えられる。近くに戎川の清流をひかえ東面にひらけるこの場所は、縄文時代に生きた人々の生活の場としての立地を十分に備えているものと思われる。しかも出土遺物からこの遺跡は、近畿でも数少ない早期に属するもので、北河内地方の早期縄文遺跡である神宮寺遺跡、穂谷遺跡、中期の星田旭遺跡と比較して、その立地の条件は非常に共通していると見ることができる。

包含層よりの出土遺物は、土器片、石器各種、礫器であり、中央部分には半円形になるであろうと推測できる約20cm立方の大数の石を配置した石組の遺構が検出された。この石はすべて花崗岩であり、焼けた跡は見出せない。遺物の散布状況は、南側のや、おち込み状の部分に山形文の押型文土器(1)、と楕円文の押型文土器の破片がかたまっていった外は特異する出土状態ではなく、石組平面を基準に散布していた。

まず出土遺物のうち土器片についてであるが、器片は大きいもので5cm×6cm程度の大きさにとどまり、合計84個出土している。

山形押型文 3個 (第11図-1・図版20-1) 厚さ5mm 焼成は中程度

出土土器片中唯一の口縁部で、山と山との間は13mm、口縁には9mm毎に刻み目を入れている。その2は表面が磨耗し文様が明確に出ていないが、平行線に近いなだらかな山形のように思われる。焼成は弱く黄褐色、厚さ10mm。その3は山の文様がくずれているが、山と山との間が38mmで黄褐色、厚さ8mm。

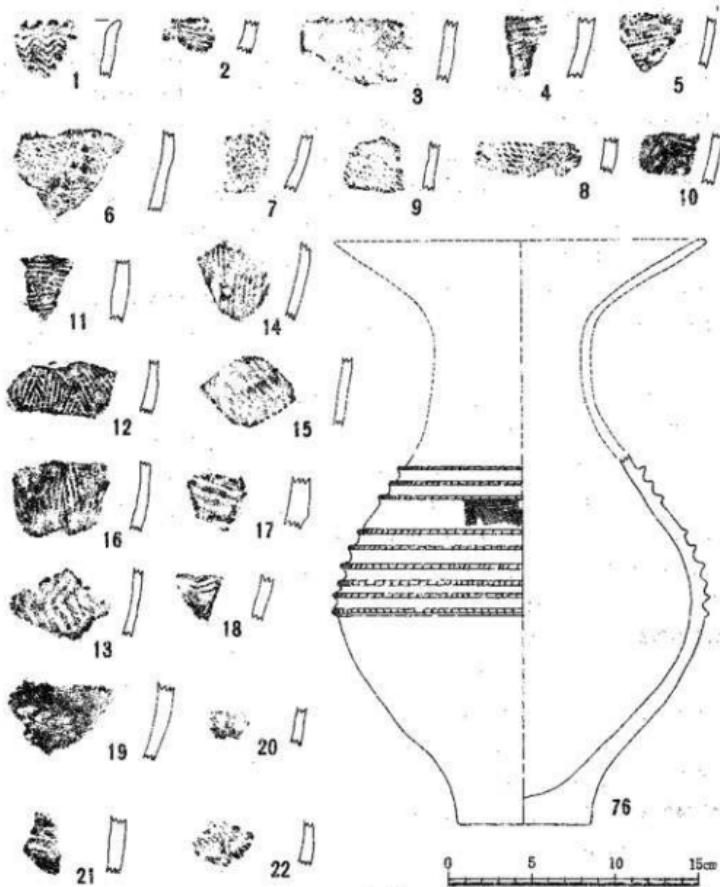
楕円押型文 6個 (第11図-6・図版20-6) 厚さ6mm 焼成は中程度

楕円の長径6mm、短径2~3mmの小粒の楕円押型を有する土器片で、いずれも胴部のものと思われる。黄褐色で土器の厚さに比して比較的大きな土器であったであろうと推測できる。小粒の楕円文は、一定方向でなく放継に施文されており、器面全体につけられ

たのではなかろうかと思われる。

貝殻条痕文 19個 (第11図-5・図版20-5) 厚さ 5mm 烧成中程度

比較的薄手の土器片で、胴部の破片が殆どで底部に近いもの 1 個。器面には貝殻による条痕が見られ、また内側にも条痕が見られる。底部に近い土器片には煤の附着が認められる。



第11図 出土土器実測図・拓影

過擦文 30個（図版22） 厚さ8mm 焼成弱

赤褐色で比較的厚手の土器で、焼成も弱く表面が磨耗しており文様を確認することはむつかしいが、二、三点同種の土器片で表面の保存の良いのを観察すると、貝殻等で擦って成型を行ったと思われる過擦痕がみられる。口縁部に近い土器片から、この土器は口縁に至って急に外反するように思われる。

その他（図版22-27）

残る土器片はごく小片であったり、磨耗がはげしかったりして、文様等の確認ができないものである。

土器と共に出土した石器は、大型搔器3、搔器19、石鎌2、石ヒ1、石錐1、剝片石器44、小型尖頭器1、ハンマーストーン1となっており、ハンマーストーン及び大型搔器1を除き他の石器はサヌカイトから作られている。搔器のうちで調整が良好と見られるものは7点で他は粗い調整である。剝片石器の中には、細石器の系列に入ると思われるものが17点程見受けられる。

田原遺跡の出土土器は一応、小粒の楕円文、山形文、貝殻条痕文、過擦文に分類することができたが、土器片には口縁部が1点、底部にや、近いもの2点で、これらから各文様をもつ土器の器形を導き出すことができないのが残念である。

田原遺跡に近いところでは、近畿で早期の一番古い時期に位置づけされている楕円の刺突文で代表する神宮寺式の土器をもつ神宮寺遺跡、また穂谷式的土器形式を与えられている穂谷遺跡があるが、これら遺跡との関連はどうであろうか。

遺跡の南部分のおち込み状から出土した山形文土器と楕円文土器は、土器の質、焼成の様子から同一のものであるとは考えられない。したがってこの山形文土器は口縁に刻み目をもち、その直下に山形を施す土器、や、口縁で外反し多分尖底となっている土器を想像するのである。次に小粒の楕円文であるが、この文様をもつ土器は神宮寺・穂谷両遺跡からは出土していない。したがって北河内をふくめ大阪府では初出のものとなった土器である。戦前に大型の楕円文をもった土器が和歌山県田辺から出土し高山寺式と呼ばれるものであるが、その後兵庫県福本遺跡や滋賀県安土遺跡からも出ており、また山陰帝釈馬渡岩陰遺跡からも出土し標準化されている。東海地方でも小粒の楕円文の出土があり、これらは帝釈馬渡遺跡と同様比較的古い時期に当るとされている。したがってこの小粒の楕円文土器は、神宮寺につく楕円文早期の前半に位置するものではないだろうか。

貝殻条痕文を器の内外に施した土器は穂谷においても見られ、滋賀県石山貝塚の石山式との関連で対比されよう。ゆるやかな山形文は穂谷との関連とみてよく、過擦文の土器と共にこの貝殻条痕文の土器は楕円文の時期より下った早期後半に属するものと考えたい。

さて、こ、で一つ気になることは、出土石器中の小型尖頭器と剝片石器中の17点の細石

器と考えられる石器のことである。尖頭器は長さ35mm、幅12mm、たてはぎで刃部両側とも細かく調整を加えたものである。また剝片は15mm～30mmのもので、それぞれ二次加工を施した痕跡を残している。これらの石器はこの田原遺跡で早期前半の山形文十幅円文の時期に使用されたものか、或はそれ以前に細石器の使用がなされていたものなのか、今後の課題としたいことがらの一つでもある。

VI まとめ

第1次発掘調査の、第1地点～第4地点においては、縄文時代早期の押型文土器、石器が戎川左岸において検出され、中世の時期では、掘立柱建物跡、近世の時期では水田耕作時の排水跡、縄文時代から始まり、宝町～江戸時代に至る各遺構が検出されたことは、田原地区の歴史の空白を埋める資料として貴重なものである。

第1次発掘調査で検出した遺構及び出土品の全面発掘調査と戎川改修予定地及び市道駿谷線の移転地を中心に第2次発掘調査を実施した。

各章において説明しているが、各時期の遺構が予想外に保存状態が良好であった。

第2次発掘調査で発見された遺構は、縄文時代早期の落ち込み状遺構2基・中世の落ち込み状遺構・掘立柱建物跡・土壌状遺構・溝状遺構が確認され各遺構内から豊富な各種遺物が出土した。とりわけ日本住宅公団田原団地建設予定地内には、あまり遺跡の存在が知られておらず、団地建設予定地外の田原地区については、南北朝時代の田原城址がこれまでよく知られてきたが、国道163号線の南側一帯に田原城址と同一時期の遺構が検出し得たことは、予想外のことであり、当時の清滝街道沿いの集落のあり方については、今回の調査において東側斜面山裾の扇状地に比較的まとまりをもった集落跡が発見することができた。

今回検出した中世の土壌状遺構内から出土した75枚にのぼる土師質小皿が一括で出土し、又、落ち込み状遺構は地表下約3.6mの深さまで調査を行ない今まで攪乱されることなく15層の堆積土層が観察することができた。又、出土した瓦器碗については高槻市教育委員会発行の上牧遺跡発掘調査報告書の中で瓦器碗の地域色と分布において、橢華型の瓦器碗とする分布範囲については少し検討する必要が生じてきた。

戎川の左岸に検出した縄文時代早期の押型文土器に伴う落ち込み状遺構、及び落ち込み状遺構を取り囲む花崗岩の石列が検出したこととは、交野市神宮寺遺跡、枚方市穂谷遺跡だけでなく近畿地方の縄文時代早期の文化を研究する上で重要な資料である。

又、弥生式土器が縄文時代早期出土の上層より1点出土している。現在ではこの弥生式土器の位置づけが非常に困難であるが、戎川の改修予定地の調査において、地表下約3m前後の白褐色砂層の下面にシルト層が検出している。しかしこのシルト層からは全く、花粉及びイネ科等の資料が含まれておらないが、この低地の全面発掘調査において今後弥生時代前期の水田遺構が検出する事も考えられる。

弥生時代前期の竪穴式住居址についても今回の調査地の西側山裾及び戎川の右岸丘陵上は、弥生時代の生活しやすい立地条件であると思われる。

ここで今回の調査によって得られた成果を本概要報告書にしめくくることにしたい。

田原遺跡に初めて人類が住みついた年代についての問題であるが、下田原 890 番地の赤褐色粘質土層から出土した石器の中に細石器及び小型尖頭器と思われる資料が含まれていることからみて、旧石器時代に人類が住みついた可能性が出てきている。又同一場所に縄文時代早期の山形文、楕円文の押形文土器、貝殻条痕文、過擦文を施した土器が出土しており、旧石器から縄文早期にかけての人類がこの田原の里に長期間住みついたことは今回の調査で明らかである。

次に弥生時代についてであるが、北河内の弥生遺跡の出現が寝屋川市太秦遺跡において、弥生時代中期に始めて出現しているが、これより一時期早い前期において天の川水系の田原において住みついている。

又、古墳時代については、戎川周辺の調査においても古墳時代後期（6世紀初頭）の須恵器片が出土している。この生駒山系の東側丘陵において横穴式石室を確認していることから今後古墳時代の後期の調査において、古墳群が生駒西麓とのあり方に少なからず重要な問題を提起する契機となることは必至であると思われる。

次に下田原 746 番地に検出した落ち込み状遺構から出土した瓦器椀の編年からみて、12世紀の中期～後期につくられ、13世紀には完全に堆積していることが断面観察においても明らかである。又、上層の落ち込み及びPitは貼り付け高台を全くつけない終末期の瓦器椀が出土しており、14世紀代とみることができる。

この落ち込み状遺構を切り合って建てられたと考えられる掘立柱建物跡及び土壌状遺構は終末期の瓦器椀を全く共存しないことから、15世紀に推定している。

最後に戎川の両岸周辺の水田地のトレンチ調査においては、地表下約 2m～3m 挖り下げて調査を実施したが、床土下は砂及び粘土の堆積であって調査は非常に難行したが約50ヶ所近くのトレンチを設定することができた。

出土遺物は各トレンチから10数点の土器片がそれぞれ出土しているが、すべての土器片については、ローリングを受けており、戎川の氾濫によるローリングであると考えられる。出土した遺物は、土師質小皿が多く、又、天目茶碗、陶磁器の出土があることから、14世紀～15世紀に、又、17世紀頃にも氾濫を受けていると思われる。



図版一 遺跡周辺の航空写真



図版2 調査地全景・落ち込み状遺構全景





図版4 落ち込み状遺構全景



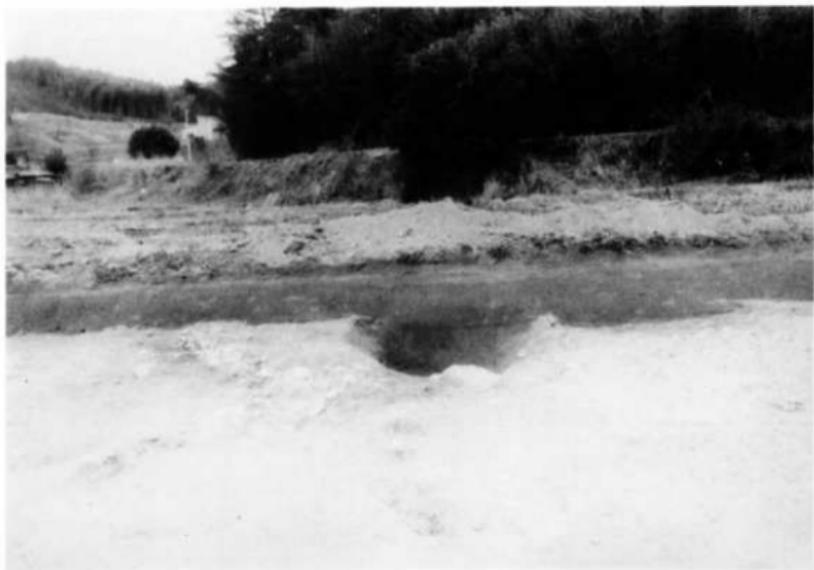
図版 5 落ち込み状遺構内土器出土状況



図版 6 土壙状遺構・石組遺構検出状況











1



2



3



4



5



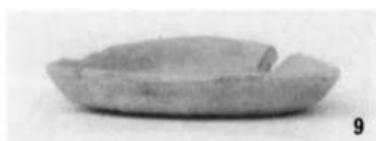
6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



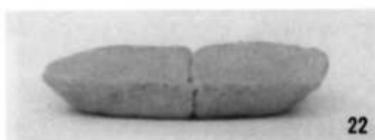
19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



46



52



53



54



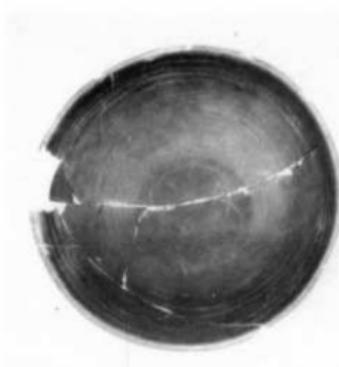
55



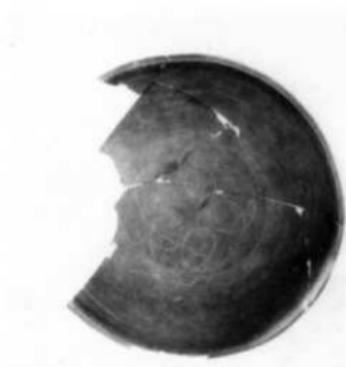
67"



68"



67'



68'



67



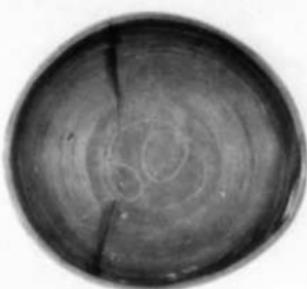
68



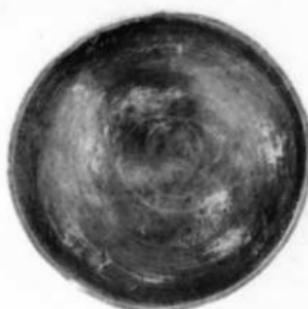
70"



71"



70'



71'



70



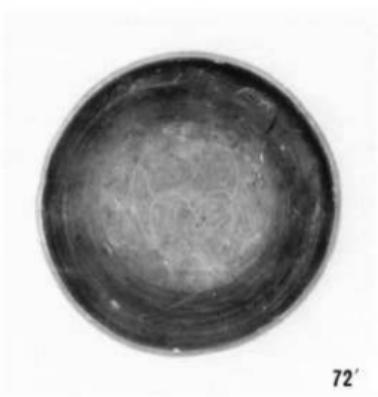
71



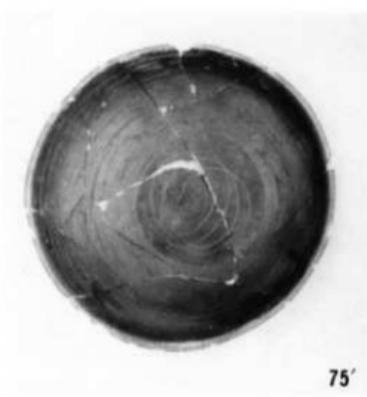
72"



75"



72'



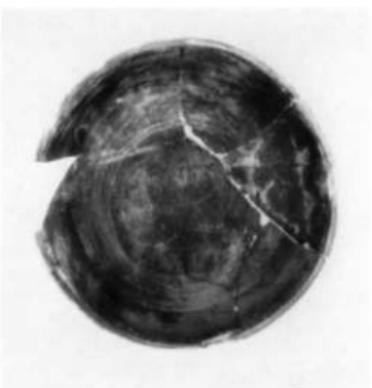
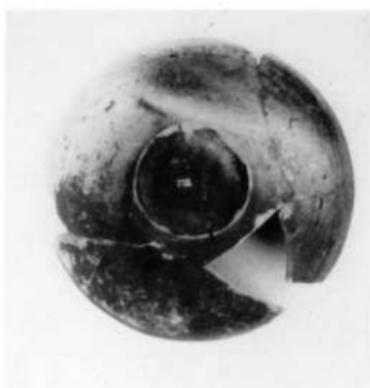
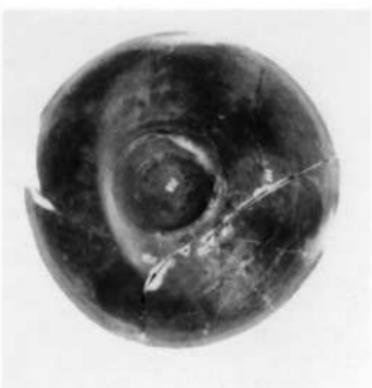
75'



72



75





73'



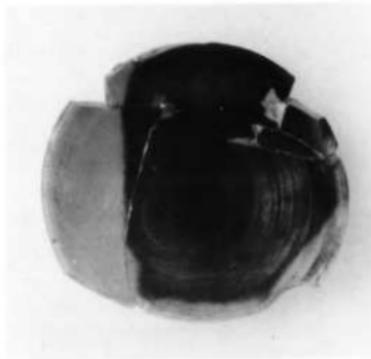
74'



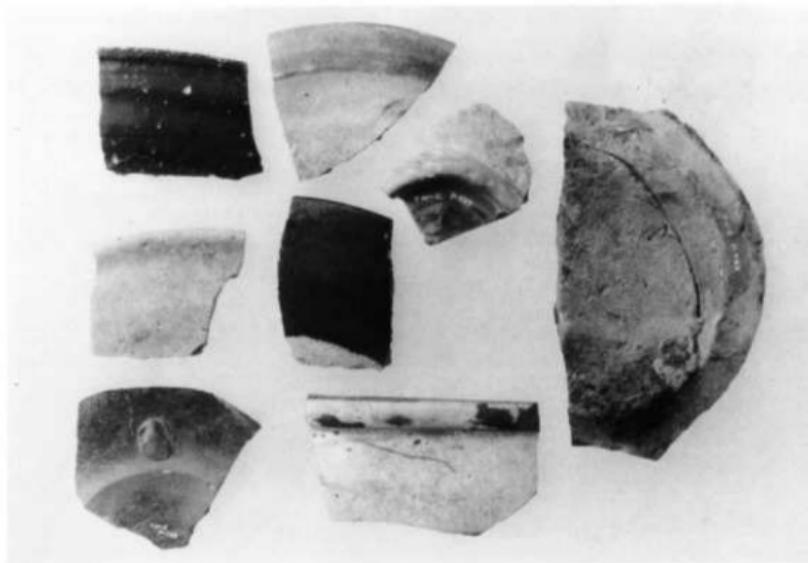
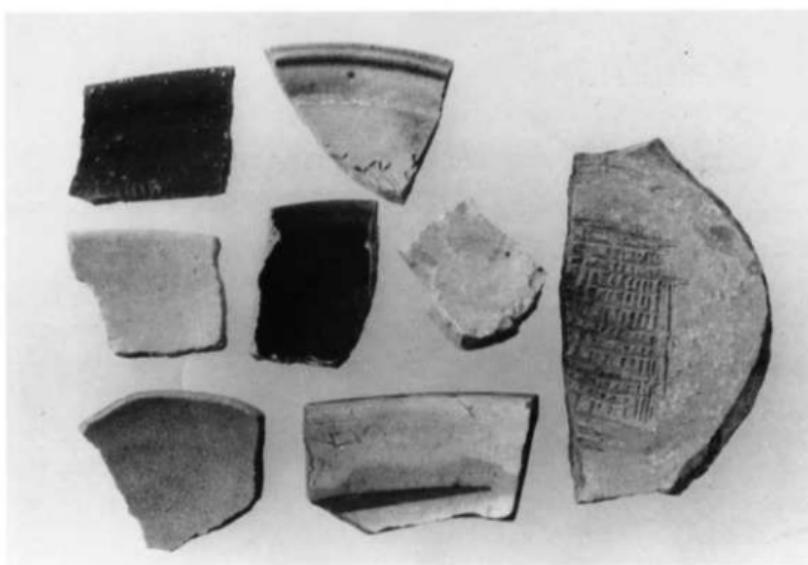
73

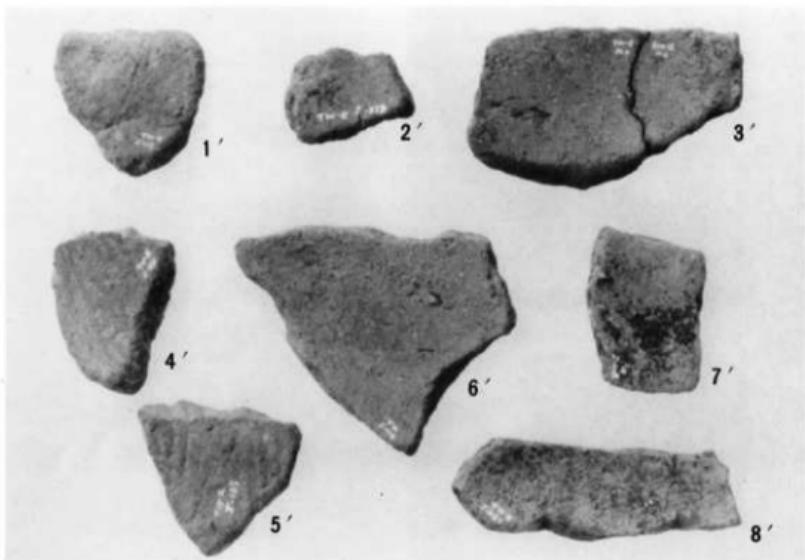
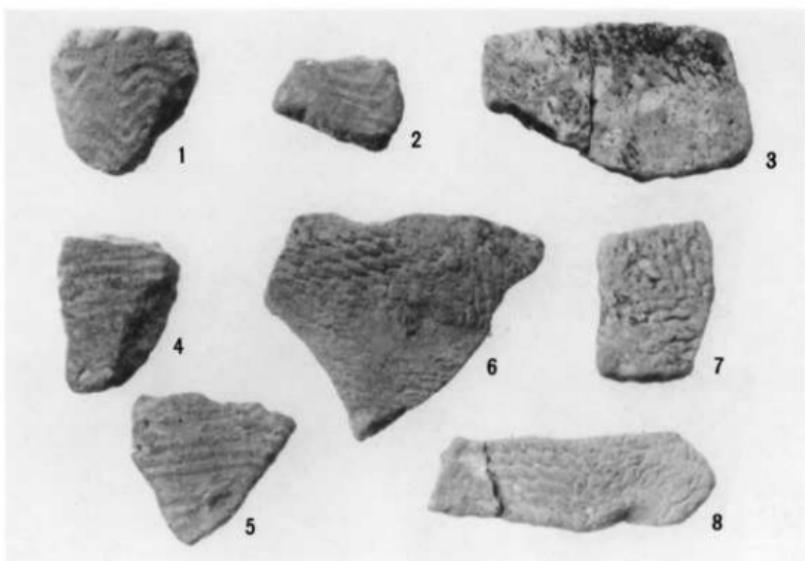


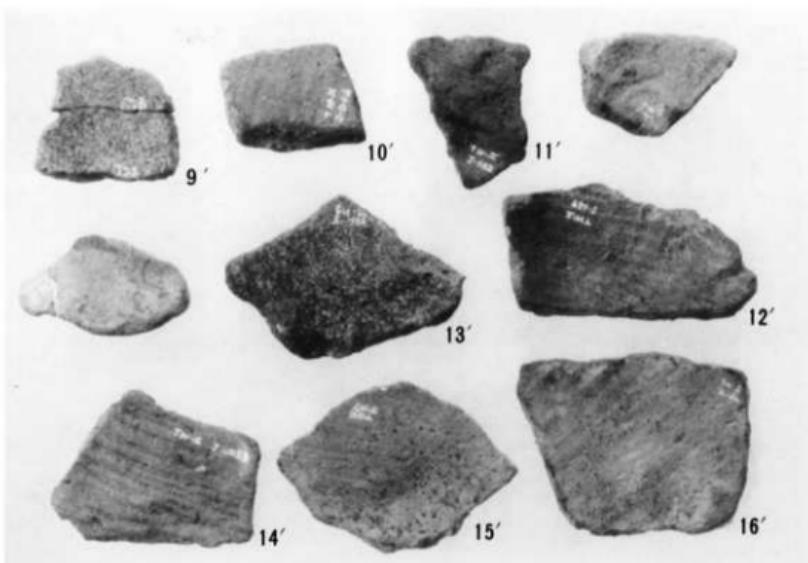
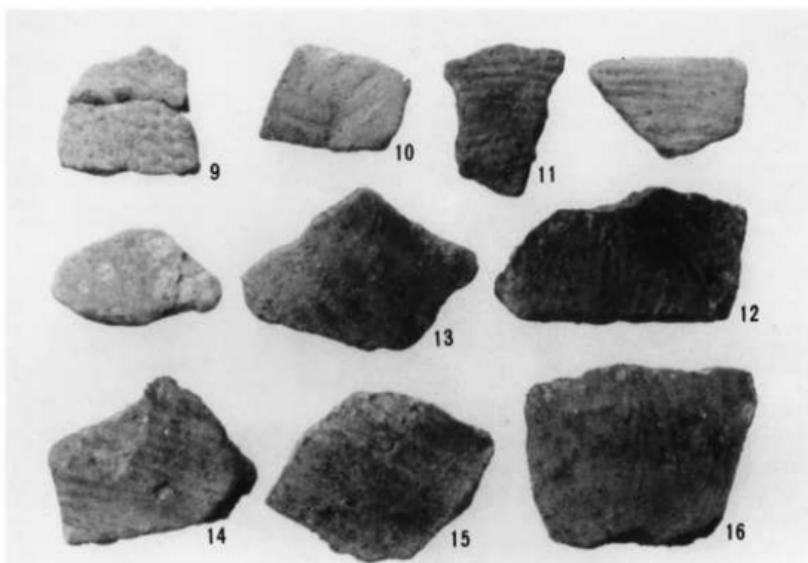
74

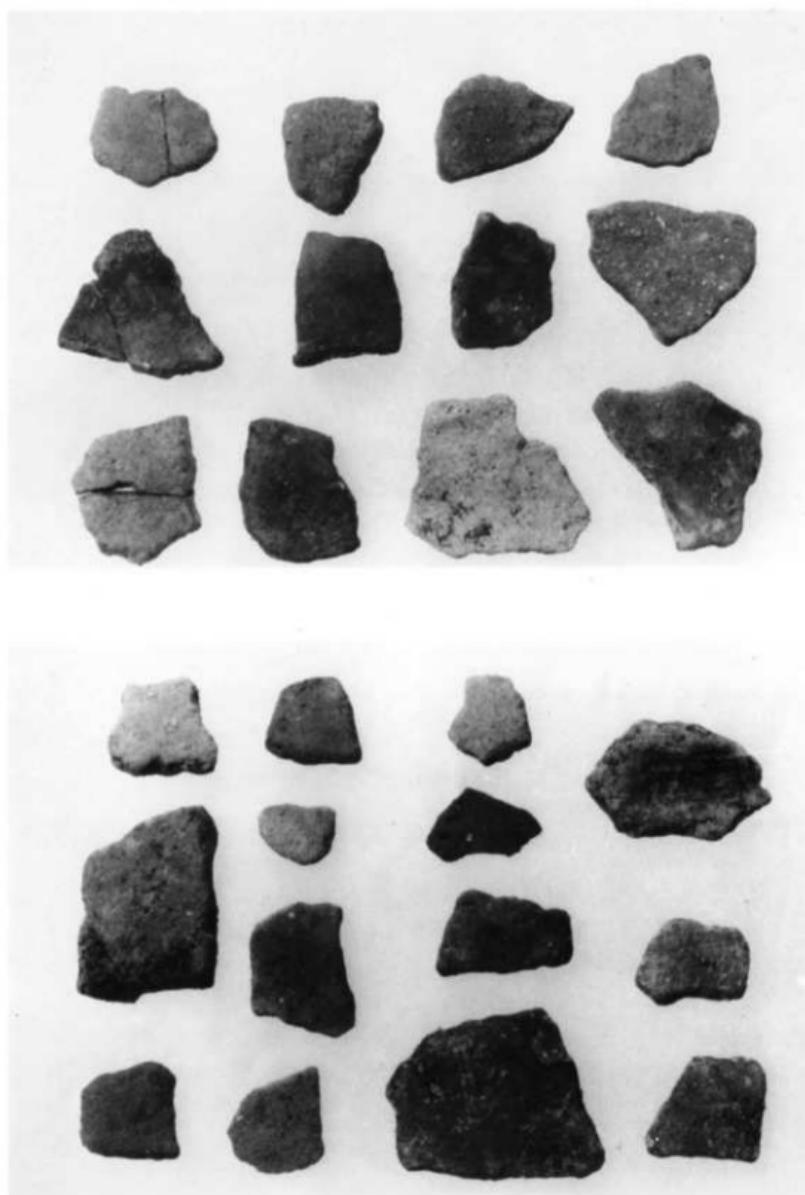


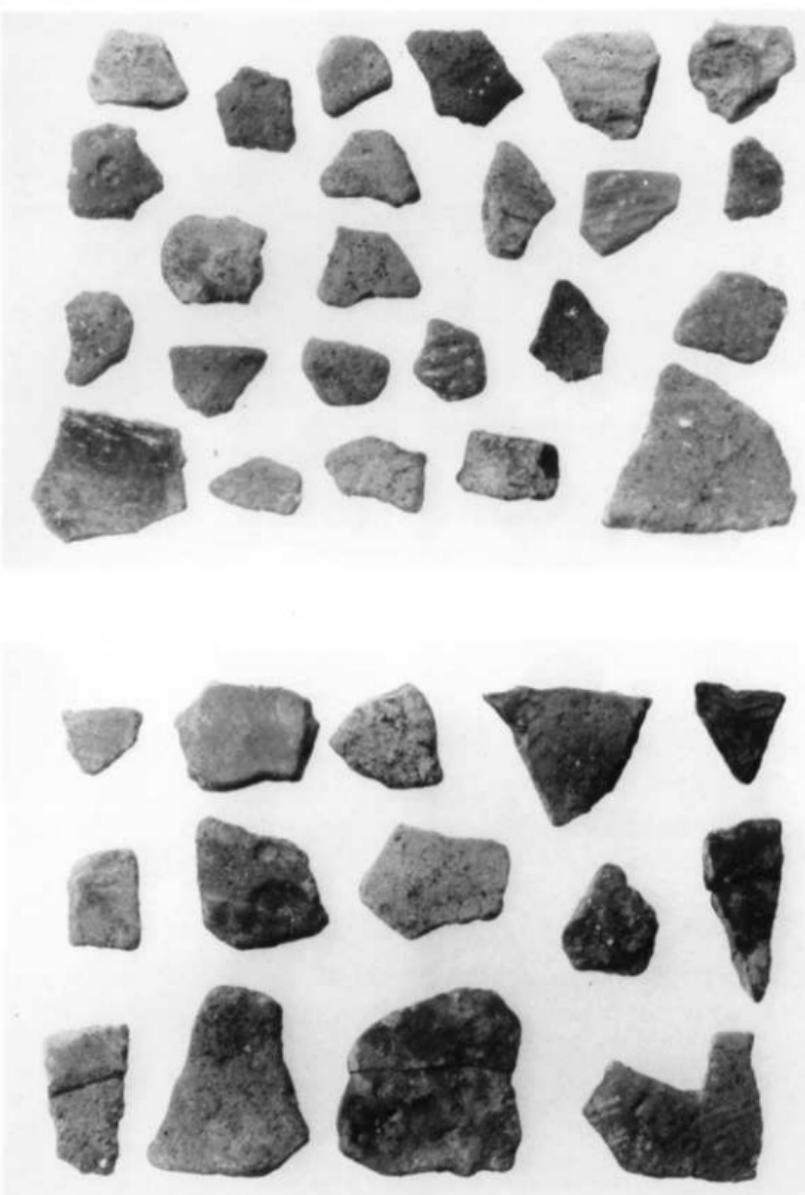


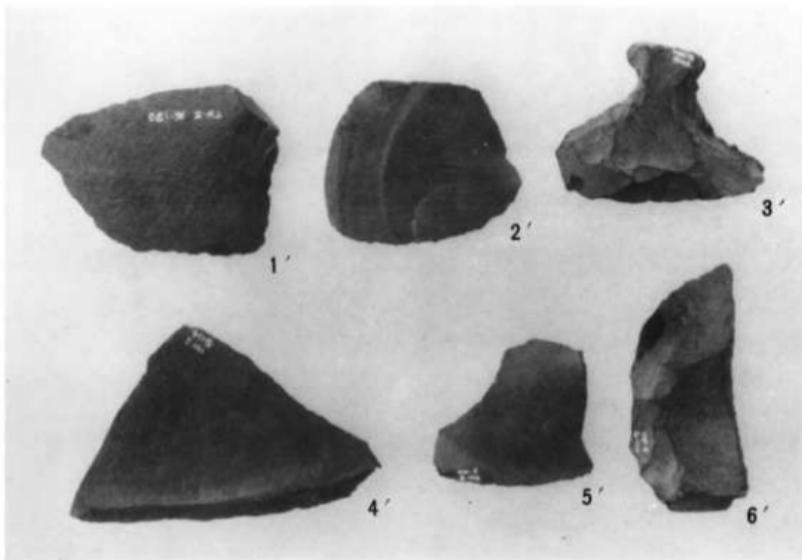
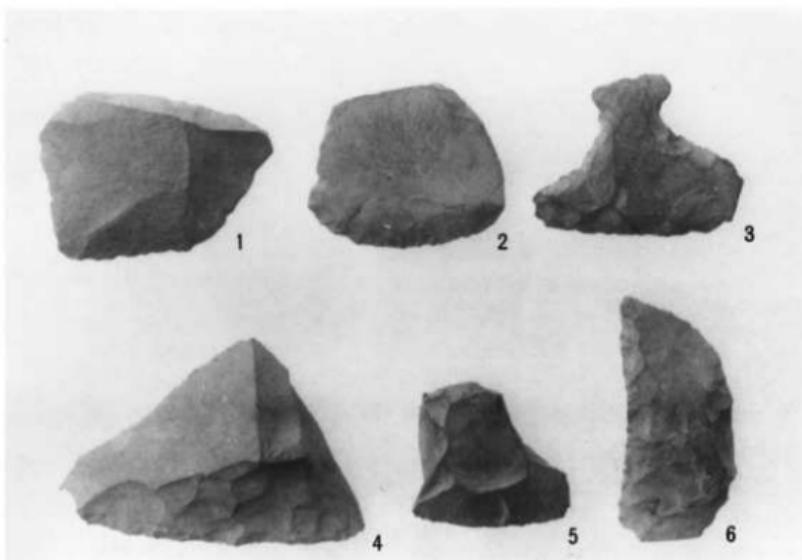


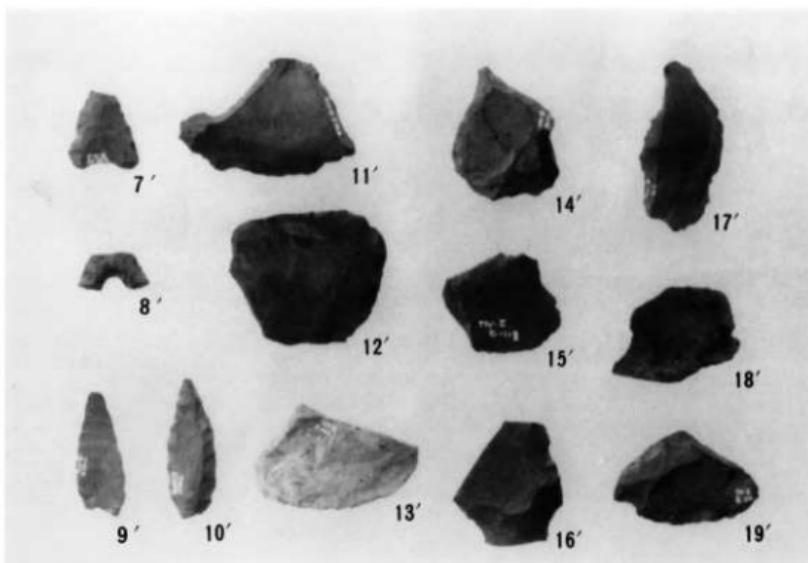
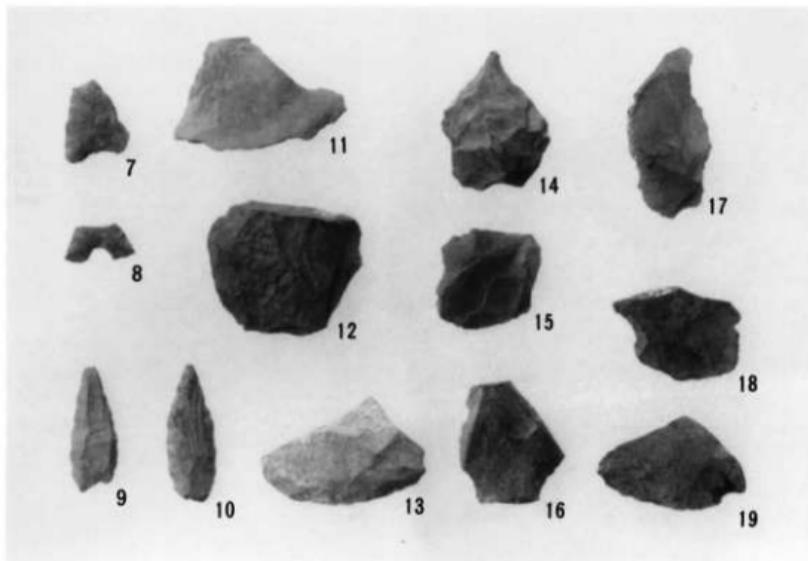


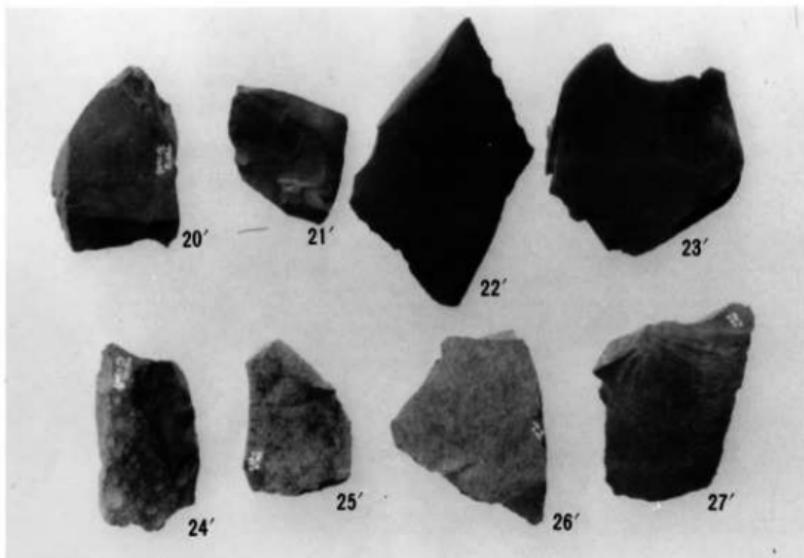
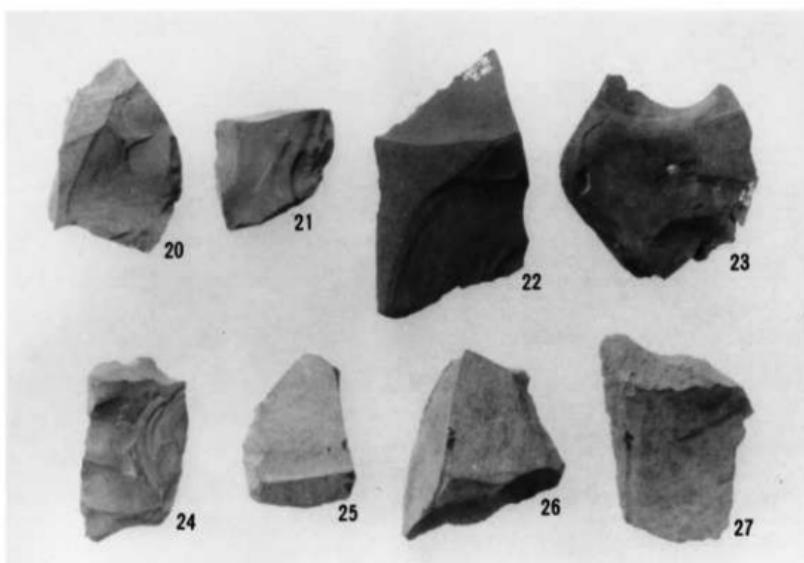


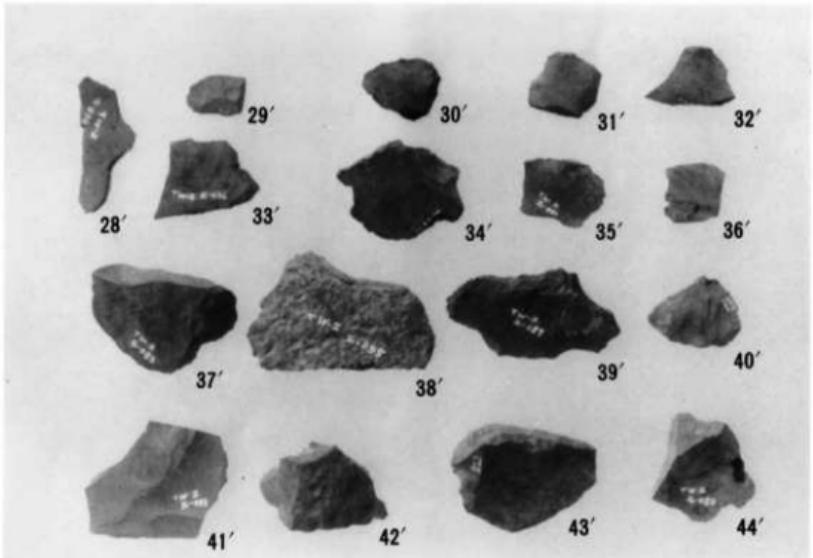
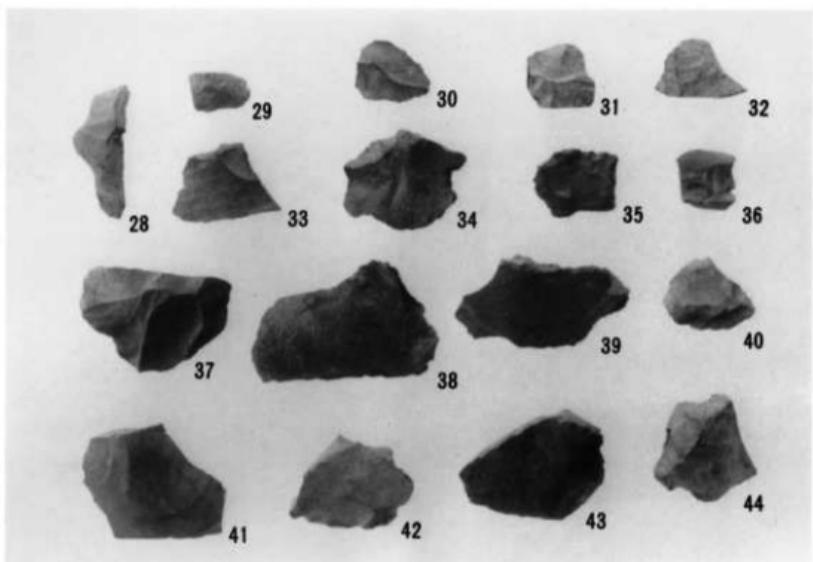


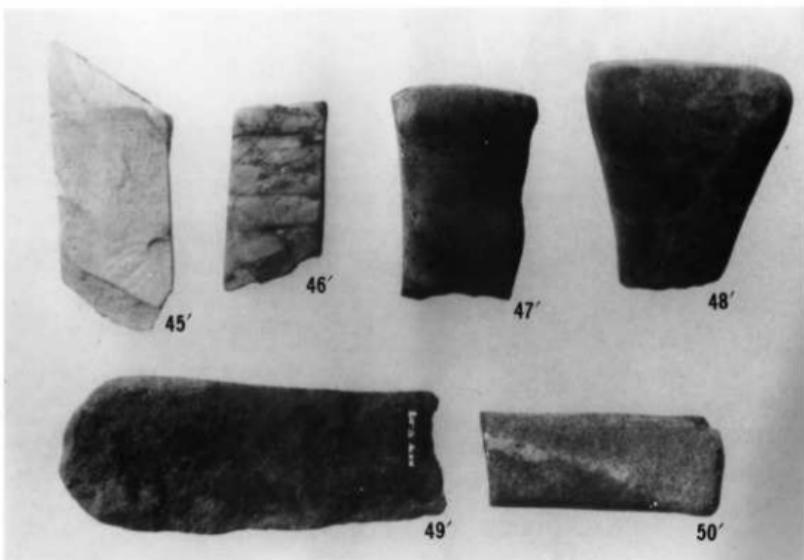
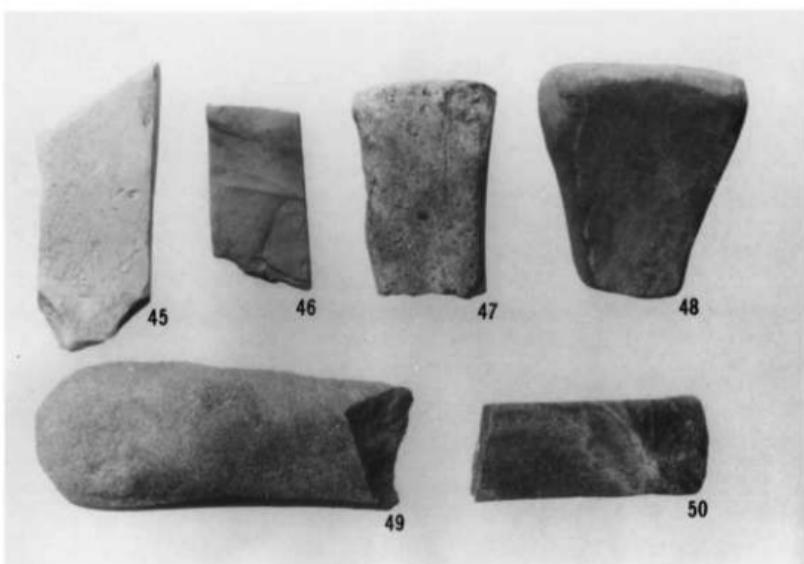












田原遺跡発掘調査概要・I

昭和55年3月発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会

四條畷市中野本町1-1

印刷 田中耕株式会社